
ドラゴンボール練習作品

トッシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンボール練習作品

【Nコード】

N7642W

【作者名】

トッシー

【あらすじ】

サイヤ人の下級戦士として転生した俺ことマーシユ。

目標は生き残ること！

そして美人の嫁さんを貰うこと！

取り敢えず粗暴な女サイヤ人は嫌だ！

あと、目が四つだったり緑色の身体だったり青色の身体の異星人も嫌だ！

あれ？サイヤ人の容姿に酷似した異星人って地球人しかいなくね？
まあいいか、ドラゴンボールや仙豆もあるし、精神と時の部屋まで

ある。

いい機会だし、一族抜けて地球に行きますか！

憑依じゃない転生だ！よって中の人などいない！（前書き）

ドラゴンボールは好きですか？

DBのSSってBLが多いし、オリ主も余り無いですよね。

そこで自分が妄想していた話を載せてみることにしました。
よろしく願います。

憑依じゃない転生だ！よって中の人などいない！

俺はサイヤ人。

名前はマーシユだ。

サイヤ人らしい名前だろう。

あれだ、ラムレタスとも呼ばれてる野菜の一種だ。

なんでサイヤって野菜っぽい名前ばかりなんだろう？

野菜ってそんなに強いのか？

話が逸れた。

さっきの話でわかると思うけど、俺は転生者だ。

決して憑依じゃない。中の人などいない！

エイジ728。俺、誕生。

ベジータはまだ生まれてないらしい。

誕生時の戦闘力は………、20。カカロットの十倍だって。

凄くない？

俺が生まれて十年経った。時が経つの早はい。

俺は先ず、秘密裏に戦闘力のコントロールを身につけた。

だって力をつけているのがバレると危険視されそうだし、怖いじゃ

ん！

だってアイツらサイヤ人、メチャクチャ野蛮だし！

マジ信じられねー！

平気で物は破壊する、平気で命は奪う。とにかく残忍だ。

俺はアレだ。確かに殺したりもしたけど、自衛以外では殺ったこと

無い。

言い訳っぽいけど仕方ないって、だってサイヤ人だし。

サイヤ人ってだけで、異星人から難癖付けられて襲われるし。

どんだけ嫌われてんだよサイヤ人。

尻尾、取ろうかな？

因みに俺の戦闘力は約18000。
凄いだろっ？

初期ベジータと同等だ。俺、『超』頑張りました。
何？高すぎる？いくら何でもソレはない？
いや、俺も初めはそう思ってたさ。

一応俺、下級戦士だし。普通はありえないし。
でも何というか、自分の潜在エネルギー、気の力。
物心ついた頃には自覚出来てたんだよ。

普通に気弾とか撃てたし。

サイヤ人の身体ってパネエ！

自分の力さえ自覚できてしまえば、後は簡単。
色々な漫画やネタ知識を総動員して修行開始。

だって主人公達も強くなつた修行方法だ。上手くないわけがない！

そんなこんなで気が付けば十歳で戦闘力18000。
気をコントロールして高めれば20000を少し超える。

もちろん隠しているため普段は戦闘力を1500程度まで落として
いる。

フリーザの一般兵よりも少し高い程度だ。

しかも俺は、前世での価値観や考え方もあって、仲間内では孤立し
ている。

むしろハブられています。

落ちこぼれ、弱虫、グズ、ラディッツ以上のいじめられっ子。
ていうかラディッツにさえ虐められている。

事あるごとに殴られたり、パシリにされたり……、ここは我慢だ。
もうすぐサイヤ人のフリーザへの反乱。

その機に乗じて…。

「無理そうです。父さん、母さん（前世の）」

「何をごちゃごちゃ言っておる！」

「い、いえ、お赦してください、ベジータ王」

無理でした。

今俺の目の前には、ベジータの父親ことベジータ王がいる。数人の部下を引き連れて、俺の前で仁王立ちしているのだ。俺は、必死で王に平伏している形を取っている。

八つ当たりを受けています。

何かね、星の地上げの事で、フリーザ達から嫌味を言われたらしい。惑星ベジータに戻ってきてから、ベジータ王の機嫌が物凄く悪いのだ。

言うなればジャイアン状態、いやジャイアンが可愛く見えるほどだ。

王は周りに常に当たり散らしている。

今日の俺は本当に運が悪い。

エリート戦士の一人から王の間を掃除しろと命じられ、現在掃除中。そこに機嫌がマックスで悪い王が帰って来たのだ。

マジでどうしようか？

不意に王が俺に向かって掌を向けた。気が集まっていく。

おいおい、殺す気か？

周りの部下はニヤついているし、止めてくれよ！

「死ね」

王は冷酷な声で宣告すると、エネルギー波を放った。

このままではヤバイので、俺は気をコントロールしてエネルギー波の直撃を甘んじて受けた。少し痛い。

これで気が済んでくれるといいんだけど。

「貴様っ！」

そうはいかないみたいでした。

なんかね、王は言葉通りに俺を殺す気だったらしい。

俺が王の攻撃に耐えた事が気に食わんらしい。

取り巻きも驚いている。

なんかスカウターのボタンを押して、首を傾げているし。

フッフ、分かるまい。

いくらスカウターで俺の戦闘力を測ろうとも無駄だ。

俺は気のコントロールがメチャクチャ得意なのだ。

しかも事は、自分の命が掛かっているのだ。

自分の実力を隠す。ソレはこの時代において、必須技能だったからだ。

俺は原作知識から、悟空VSギニュー特戦隊の時の悟空の戦闘力のコントロールを参考にして、ひたすら努力していたのだ。

攻撃や防御に移る一瞬、その一瞬だけ大幅に戦闘力を引き上げる。

スカウターでさえ拾い切れないほど短い時間。

王と部下のスカウターに表示されている俺の戦闘力は依然として1500程度のはずだ。

「ば、馬鹿な、小僧、何をした！」

「…」

「何を黙っている！ベジータ王の命令だぞ！」

「素直に答えろ！落ちこぼれのクズが！」

マジでどうしよう。

せっかく今まで大人しく慎ましく過ごしていたのに。

虐められても孤独でも我慢してきたのに。

ベジータ王も次のエネルギー波を撃とうとしているし。

マジでムカツイてきた。

何で俺がこんな目に？呪われてるのか？

「黙れ」

「な、何だと？」

気がつけば俺はそんな言葉を発していた。

どうやら限界みたいだ。

考えてみれば俺は強者、目の前のコイツらは弱者。

ここまでコイツらにコケにされながら我慢する自分。

もう楽になってもいいよね？

「黙れって言ったんだ。雑魚が！」

「貴様、何を言っておるのか理解しているのか？」

「そうだ！死にたいのか？」

「よく言う、どっちにしても殺す気のくせに、でもさ」

俺は平伏のポーズを止めて立ち上がった。

「でも、ベジータ王、アンタ弱いな」

「な、何だとっ！？」

「それに周りのバカども、王の取り巻きで良い気になるのはいいけどな、見苦しいぜ」

「な、なにイ！？」

「こ、コイツ！」

取り巻き共は怒りの表情で飛びかかってきた。

三人のサイヤ人。しかも相手はエリートだ。

気を探ってみると、それなりの力を持っていることが分る。

スカウターも警戒警告を表示している。

三人は何れも4000を超えた力を持っていた。

それでも俺の敵ではないが。
俺は取り巻きの攻撃にそれぞれカウンターを合わせた。

「がっ!?!」

「ギイツ!?!」

「グハツ!?!」

蹴り、肘打ち、膝。取り巻き達の身体が派手に跳ね上がった。
五体に伝わる鈍い感触。

三人は派手に吹っ飛び壁に激突、事切れた。

「な、何だと!?!」

ベジータ王の驚愕の声。

下級戦士がエリート戦士、しかも王の側近に選ばれる程の戦士を瞬
く間に倒してしまったのだ。
戦闘力数値至上主義のサイヤ人にとって、受け入れがたい現実であ
る。

俺は驚愕しているベジータ王に若いかけてやった。

「いくらスカウターを操作しても無駄だ」

「貴様、いい気になりおつて。それにしても力を隠していたな小僧」

「さあな、頼みのスカウターに聞いてみるよ」

「ふん、故障した機械など役立たずだ」

ベジータ王はそう言うと、スカウターを落とし踏みつぶした。

「ん?他の部下は呼ばないのか?」

スカウターは通信機にもなっている。

俺が懸念していることだ。

取り巻きのスカウターは、攻撃と同時に壊した。王のスカウター、部下を呼ぶ前に壊したいと思っていたが、まさか自分から壊してくれるとは。ラッキーだ。

「貴様ごとき下級戦士を処刑するのに助けは必要あるまい」

ベジータ王は不敵に笑った。

「あ、そ」

本当にツイてる。

俺の隠していた実力。もしかすればバレずに済むかもしれない。コイツの口さえ封じれば。

「死ね！反逆者の小僧っ！」

ベジータ王が猛烈な勢いで突っ込んできた。

身体から青白いオーラを漲らせて。

スカウターに表示されている戦闘力は12000。

腐ってもサイヤ人の王様だな。

と、騒ぎになるのはマズイ。手早く済ませるか。

俺は王の拳を正面から受け止めた。

「な、なにイ！？」

「はっ！！」

「ぐぶっ！？」

本気の自分の攻撃を受け止められるとは思って無かったのだろう。王はぎよっとした表情で固まった。

俺はその隙を逃さずに腹に正拳を叩き込む。
堪らず王は膝をついた。

ガシッ!

俺は崩れ落ちる王の頭を掴み

「ふんっ!」

そのまま全身から気を放出。

王の掴んだまま壁に突っ込んだ。

サイヤ人達の居住区とは真逆の方を計算に入れて飛ぶ。

「がああああっ!!!」

サイヤ人の生活区域から程良く離れたところで、俺は王の投げ飛ばした。

「さて、この程度じゃないだろう裸の王様?」

「お、おのれっ!」

流石はベジータ王。まだ戦う気らしい。

それにそれ程ダメージは受けてなかったらしい。

騒ぎになるのはマズイため、手加減が過ぎたらしい。

でもこの場所なら。

俺は奥に向かってニヤァッと笑ってやった。

王は思わず後ずさった。

「ぐはっ!」

次の瞬間、王の顔面に俺の膝がめり込んでいた。

続けて髪の毛を引っつかみ、遙か上空へとぶん投げる。

「うおおあああああ！！！」

高速移動で後を追いかけてベジータ王の上を取り両腕を振り下ろした。

ベジータ王は地面に激突。

大ダメージの所為か戦闘力を大幅に落として、痙攣している。

「ぐ、ぐぐぐ、ば、馬鹿な」

「これで決着だな、裸の王様」

俺はつつかつかとベジータ王に歩みを進めた。
王は憎々しげに俺を見上げた。

「さて、どうしてくれよう」

「わ、わしを殺すのか？」

「死にたいのか」

「ぐっ！」

俺は溜息をつくと、ベジータ王に背を向けた。

「待て！何処に行く気だ！」

「俺の勝手だ」

俺は更に足を進めた。

「ぐ、ぐおおおおおおおっ！！！！」

完全な不意打ち。

ベジータ王は俺の背中に向かって全力のエネルギー波を放った。

「バカめ！そのまま消えるがいい！」

俺は振り向き様に腕を振るった。

「な、何だ、と？」

王の全力のエネルギー波。

ソレを俺は片腕で払いのけた。いや、はじき飛ばした。

俺は一瞬で王の前に移動すると、後頭部を踏みつけた。

王の顔が地面に埋まる。

「やれやれ、だ」

俺は地面に埋まった王の顔面を引き上げて、顔を覗き込んだ。

流星はサイヤ人の王。憤怒の表情。

「アンタは俺みたいな下級戦士を相手をしてる暇は無いと思ってたけど？」

「お、おのれえ！」

「フリーザを殺すとか言ってたな？」

「その前に貴様を殺してくれる！」

「無理だって、ソレは今理解しただろう？裸の王様？」

俺はさらに王の顔を引き寄せせる。耳元に口を近づけてあざ笑うように言った。

「なあ、裸の王様、俺、これを機に一族を抜けるわ」

「何だと？」

「おっと、止められると思うなよ？フリーザ如きに手を拱いてる今

のアンタじゃ絶対に無理だろうけどな！」

とにかく原作通り、フリーザにでもぶつかって玉砕してくれ。でもって成仏しろ。

「それとも部下を呼んで今度こそ俺を袋叩きにするか？無理だよなあ！？相手は十歳になったばかりの下級戦士のガキ。ソイツを相手にこんなザマを晒しているアンタの姿を知れば、サイヤ人達はどう思うかな？」

俺の言葉にベジータ王が表情を青くした。

コイツは戦士としては優秀だが、人一倍、権力欲が強い。そこを刺激してやる。

「一体何人の部下がアンタに付くのやら」
「う、うう」

「そしてアンタは本当に裸の王様になる」

十歳に下級戦士の子供に完膚なきまでに負ける。

その事實は、間違いなくサイヤ人という枠組みの中で勢力を二分させる。

サイヤ人は実力主義だ。

もしこの事実が他のサイヤ人に知れば、間違いなく自分は王の座から転がり落ちるだろう。ベジータ王は顔色を青くして膝をついた。

「悔しかったら、フリーザでも相手に腕を磨くんだな。まあ、アンタ如きじゃ無理だろうけど。ドドリアとザーボンを倒せれば良い方じゃね？」

「ぐ、貴様っ……があっ!？」

「取り敢えず、俺が逃げる間、寝ててくれ」

悔しそうに顔を上げたベジータ王。

俺は背後に回りこんで延髄に手刀を落とした。

「さてと、こんな辛気臭い星からはさっさとオサラバしますかね」

俺は気を失って倒れている王に背を向けて歩き出した。

目指すは地球。

取り敢えず仙豆とドラゴンボールが欲しい。

あの性格の王なら俺に負けた事を吹聴しないだろう。

脅しかけておいたし。

とにかく原作通り事が運びますように！

俺はカカロットが乗せられる予定のポットから地球の座標を確認すると、自分のポットに乗り込んだ。

「じゃあな、惑星ベジータ」

俺は宇宙船ポットを発進させると、コールドスリープで眠りについた。

これから始まる物語に思いを馳せて。

憑依じゃない転生だ！よって中の人などいない！（後書き）

マーシユの名前の由来はラムレタス。

羊の耳みたいな形のレタスです。

何語か忘れましたが、マーシユをラムレタスともいうそうです。

マーシュ君、二十歳（前書き）

マーシュ君のハチャメチャ大冒険、始まるよ！

マーシユ君、二十歳

エイジ748

俺ことマーシユは地球に到着。

とある大陸の上空で佇んでいた。

何？地球に付くのが遅すぎるって？

仕方ないじゃん。ちよつとしたトラブルに巻き込まれたんだから！

あれだよ。デブリっていうのか？

宇宙空間にあるゴミの群生。

アレのせいで宇宙船ポットに不具合が発生。

コールドスリープが切れちまつたんだよ！

仕方ないから近くの惑星に寄って宇宙船を修理。

したまでは良かったんだけど、これまたトラブル発生！

記録しておいた各惑星の座標データが全部消えてた。

おかげでこの十年。様々な星を転々とする事に…。

まあ、そのおかげで良い経験ができたと自負していますが。

因みにこの十年の修行で戦闘力は更に上がりました。

界王拳の真似事も出来るようになったしね。

実際、オーラが赤くなります。

戦闘力も倍化します。これは成功と見て間違いないでしょう。

師匠である界王様がいないからかなりの時間が掛かったけど…。

独学にしちゃ出来でしょう。

気のコントロールは得意ですから！

界王拳の倍率は十倍まではイケル。

基本戦闘力は約180万。

スカウターでは計測不可だけどね、計算すれば何となく分かる。
超サイヤ人には、未だ覚醒出来無い。

閑話休題。

まあそんなこんなでなんやかんやで俺は地球の座標データを再取得。
色々な事を経験しながら漸く地球に到着したのだ。

で、気が付けば原作開始の一年前だった。

いやよかった！間に合ったよ！

これで直ぐ近くで『ドラゴンボール』を野次馬出来る。

マジでオラ、ワクワクすっぞ！

で、俺が今何をしているかというと、聖地カリンを搜索中。

ここは気を探るよりもスカウターに頼った方が確実だ。

今の地球、戦闘力500を超えている奴なんて何処にも居やしない
筈だ。

確か亀仙人の戦闘力が100程度、修行後137だった筈。
となれば…。

「南の方角に97、東北東に82、南東に…ん、これだ」

俺はスカウターに表示された数値を確認しながら思わず笑みを漏ら
した。

「同じ場所、高度は違うけど、戦闘力107、275か。神様とカ
リン様だな」

これで漸く仙豆が手に入る。

俺は嬉々として聖地カリンに向けて飛んだ。

暫くすると、天空に向かって伸びる一本の塔があった。間違いなくカリン塔だ。

俺は素早く地面に降りると徒歩でカリン塔に向かう。飛んでも良いがセオリー通り、普通に登ろう。

ボラとウパ親子に挨拶しても良いが、やめとこう。彼らは確かこの聖地を守る部族だった筈。

悟空の様な恩人なら兎も角、俺みたいな怪しい人間を初対面で受け入れるとは思えない。

それに戦いになっても嫌だし。

よし、気づかれないように素早く登ろう。

俺は桃白白の真似をして足で塔を駆け上がった。

1秒と掛かりませんでした。

「ここが頂上があ」

本当は更に上があるが、何かこう感慨深いものがあるな。

俺は塔の中を歩きながら気を探る。

後ろ。俺を見る視線を感じる。

取り敢えず声を掛けてみよう。

「アンタがカリン様？」

俺は振り返ること無く後ろに意識を向けながら声を発した。

「お、驚いたのう、オヌシ、いつの間にここまで登ってきたのじゃ？」

「さっき付いたばかり、アンタが……猫？アレ？カリン様は？」

「わしがそうじゃよ」

「マジ？」

うん。

取り敢えず自然な流れを演出できた。

大抵の二次創作なら初対面なのに当たり前のように接するからな。しかも馴れ馴れしく。

でもってその迂闊さが原因で不審がられる。

でもって正体暴露つと。

俺はそんなへマはしません。

自分が転生者だという事は墓の中まで持ってくつもりだ。

「えっと、力が何倍にもなる聖なる水、飲みに来ただけど？」

有る？

おれは仙人が猫だった事に戸惑を感じている風を装いながら聞いてみた。

「うむ、超聖水の事じゃな？」

カリン様は手に持っている杖を塔の中心部に向けてた。

そこには長細い台座に収まった水差しが置かれていた。

原作通りか…。

「貰っても？」

「好きにするがいい、但し飲むことが出来ればの話じゃが」

「うん、今飲むところ」
「な、なんじゃとっ！」

俺は高速移動で超聖水を手に入れると、ソレを一気に煽った。

「んぐ、んぐ、んぐ……ふう」

うん、旨い。

良い水でした。

「このワシが、まるで見えなかった」

カリン様めちやくちや驚いてる。

多分妨害する気だったんだろーけど。

「んー、何も変わってないみたいだけど？」

超聖水を元の位置に戻す。

「そりゃそうじゃ、実はタダの水なんじゃからのっ」

「そっか、でもどうして？」

取り敢えず聞いておく。

これもやっぱり俺の知る通りの理由だった。

カリン様から超聖水を奪う。カリン塔の登り降り。

これ全て修行なのだ。

カリン様から超聖水を奪うことに成功したその時。

その者の強さやスピードは飛躍的に向上しているのだ。

「お主は修行など必要なかったがのう」

カリン様は面白くなさそうに毛繕いを始めた。
すいませんね！

俺だってカリン様から

「外界に降りて修業の成果を試してくるのじゃ
とか言われたかったよ！

そこで

グウウ。

俺の腹の虫が鳴った。

そういえば地球に来てから何も食って無かった。

これはいい流れだ。

「なあ、カリン様。何か食べるもの分けてくれない？」

「うむ、いいじゃろう」

カリン様は塔の隅に置いてある壺の中から豆を一粒取り出した。
此方に投げ渡す。

「えつと、これギャグ？」

いきなり疑いもせず食べるのはトリッパー丸出しの転生者。

俺はそんなへまはしない。

嘘です。準備して無ければ間違い無くへまやらかしてバレてました。
実は地球に到着してから数時間。

怪しまれないための演技と、各キャラへと対応をシミュレーション
していました。もし誰かに見られていたら恥死してたな。

カリン様、仙豆について説明中。

「へえ、味はともかく便利だな。カリン様、仙豆、少し分けてもら
っても良いですか？」

「構わんよ。好きにするがいい」

「じゃ、遠慮なく」

俺は腰に取り付けてあるポシエットに入るだけ仙豆を突っ込んだ。
うん、間違いなく100粒以上入ったな。

「じゃあカリン様、お世話様」

俺はカリン様にお辞儀をすると、カリン塔から飛び降りた。
高速移動と舞空術で素早くその場を離れた。

次は西の都。

ホイポイカプセル欲しいな。

取り敢えず適当に街のある島か大陸に降りるか…。

到着したのは西の都ではなく東の都。

俺の知る地球とは比べものにならない程、文明が発達している。

人間に混じって二足歩行する服を着たワニやら犬やら豚なんか歩いているが。

まあ、宇宙ではもっと凄いのがいたけど…。

俺は適当に街をぶらついている。

暫く歩いて俺は足を止めた。

俺の視線の先にあるのは、ストリートファイトだ。

挑戦者から挑戦料を貰って戦い勝利すると、賞金が出るらしい。

挑戦者を難なく殴り飛ばしているのは強面の大男。

戦闘力だったの6。ゴミめ。

挑戦して金をせしめたい所だけど…。
生憎俺は文無し。1ゼニーも持ってない。

「ん？」

ふと目に入ったのは、大男の隣にいる怪しげな男。手には挑戦料と書かれた箱を持っており、中には大量の札束が有った。

「よし」

俺は高速移動で、一枚だけ札束を抜き取ると、大男の前まで歩み寄った。

どうやら周りの人間達は、怖気付いたようで、挑戦に尻込みしているようだ。

これなら俺が出て問題ないな。

大男が俺に気がついたようで、馬鹿にしたように笑う。

「何だ、兄ちゃん、もしかして挑戦者かい？」

「ああ、挑戦させてもらおう」

俺は先ほど抜き取った札束を隣の男に手渡した。

「いい度胸だ！皆さん、今度の挑戦者は見たところ、何処にでもいそうな普通のお兄さん。彼の勇気に拍手を！」

なんか馬鹿にされてる。

そりゃ確かに俺はイマイチ見た目の迫力に欠けるけどさ。

「勝てば、十万ゼニーと今までの挑戦料？」

「ええ、勝てればの話ですが」

「じゃあ」

俺は大男の前へ立った。

お互い睨み合う。いや俺は別に睨んでないけど。

「初め！」

隣の男の合図で戦いが開始される。

始めの合図の瞬間。

俺は間合いを詰めると、デコピンで男をふっ飛ばした。

ふむ、完全に気絶しているようだ。

しかも背骨が折れてる。手加減したんだけど…。

なんという脆い民族だ！

啞然とする野次馬と、大男の相棒。

俺は、ソイツの前に歩み寄った。

「俺の勝ちだ。賞金ちょうだい」

「ど、どうぞ〜」

「ありがと」

俺は賞金を受け取ると、手早く仕舞い、その場を後にした。

しかしこんな端金じゃ、家や乗り物のカプセルは買えない。

それに今の俺には必要ないし…。

今の俺に必要なもの。

俺は考えた。

そして。

「よし、世界地図を買おう」

そんな結論に達したのであった。

俺は嬉々として、シヨップを探し始めたのであった。
やりたいこと、欲しい物は色々ある。

だけど、下手な事して原作は壊したくない。

実は俺、ドラゴンボールを壊す気は殆ど無かったりする。
タダの野次馬。

もちろん介入したい場面はあるし、叶えたい願我也有。

ソレはあまり物語に影響を与えない場面に限る。

よし、もう一度妄想シユミレーションだな。

俺は世界地図と一般教養の本、そして衣類と食料を買い込むと、東
の都を後にした。

続くかも

マーシュ君、二十歳（後書き）

次回はいよいよ原作に絡むかもしれませんが。
そのうち番外編とかもやりたいな！

外伝・寄り道（前書き）

原作には絡みませんでした。
すいません。文才不足です。

外伝・寄り道

どうも、マーシユです。

あれから約一年。世界を見て回って時間を潰してた。

世界を回ることに事態は、舞空術で短時間で終えることが出来た。取り敢えず、まず原作キャラの存在を確認をした。

パオズ山で悟空、西の都でブルマ。荒野でヤムチャとプーアルとある田舎の村でウーロン。コイツは見つけるのに苦労した。

あと、レッドリボン軍も存在してた。マジで悪い噂が絶えない。

で、現在、俺はというと…。

「キーーーーン！」

「クピポー！」

「あはは、待ってくれよ！アラレちゃん、ガツちゃん！」

ペンギン村にいます。

アラレちゃん達と遊んでます。

いや、世界を見て回っている時にちよと…。

だってあのペンギン村だけ？

アラレちゃんですよ。作品違うけど、この世界にも有ったんだよ。

感動したね！

俺、アラレちゃん好きだし。

サイヤ人になった今でも、この娘には勝てる気しねー。

地球割りパネエ！

んちゃ砲スゲエ！

閑話休題。

まあ、色々あってアラレちゃんと知り合い友達になった。一緒に走りまわったり、一緒にウンチつついたり。二十歳にもなって何やってんだ俺。

童心に帰りすぎだろ！？

でも仕方ないじゃん！楽しいし！

今までサイヤ人や他の異星人の中で殺伐とした人生だったんだぞ！碌な少年時代送れなかったんだぞ！

ちよつとぐらい楽しんだっていいじゃん！

なんかもう、原作どうでも良くなってきたわ…。

「ほよ？マーシユ君、どしたの？」

「クピ？」

アラレちゃんとガツちゃんがキョトンと首をかしげる。
カワエエなー、もうっ！

「何でもないよ。それよりも、この後、どうする？」

「怪獣ごっこ！」

「クピポ！」

いいねえ。

この前披露したアレが気に入ってくれたのか。
見せたかいたあったなー

「じゃあ、リクエストに答えないとなー」

「ワクワク、ワクワク！」

俺は気を集中すると、エネルギーの塊を作り出して、上空に投げた。
そして

「弾けてまざれっ！」

俺が作り出した球体は地球の大气を吸収して、より輝きを増す。
俺は希少な月を作り出せるサイヤ人。

パワーボールと酸素を融合させて、満月を生み出せるのだ。
俺は創りだした満月を凝視した。

目が月の光を吸収。尾に反応し変身が始まる。

「ウ、ウウウウウ……」

こんな時、戦闘服は役に立つ。

元に戻った時、服が破れていれば、俺は唯の変態だ。
おっと、余計なこと考えてる間に変身完了だ。

「グオオオオオっ！！！」

「すごい、すごい！かっくいいーっ！」

「クピポー！」

こんなに喜んでくれるんだ。

なんかホロリと来るよな。

なんせ、大猿といえば恐怖の代名詞だよ。

一度変身すれば、全てを破壊し、殺し尽くす。

今まで数多の惑星の文明を滅ぼしてきたんだ！

「お、またマシューの奴が変身してるぜ」

「ま、オレらは、つくつんの奴で慣れてるからな」

「変身がなんぼのもんじゃない」

大猿はペンギン村の子供たちにモテるのだ。

生きてて良かった！

「コラー！そんなにでかくなって、逮捕だー！」

「アラレ、マシュー君！」

お、センベエさん、それにお巡りさんも来た

一つ脅かしてやるか。

「オオオオオオオオオツ！！！」

俺はドラミングをしながら吼えた。

「ウヒィ！」

お巡りさんは、驚きのあまりパトカーを転倒させた。

そのまま転がっていき、木に激突。いつものパターンだ。

「キャハハハ！」

ソレを見てアラレちゃんが爆笑。
まあ、そんな感じで俺はペンギン村での平和を満喫していたのだ。
な、原作なんてどうでも良くね？
ドラゴンボールなんて……ん？
ドラゴンボール…。

いやいやいや、忘れちゃ駄目だ。
そう、ドラゴンボールだ！
願いだ！願いを叶えないと！
そつだよ、忘れるところだった！
原作に影響を与えずに、願いを叶えられる時期ってこの時しか無い
じゃん！
ウーロンがギャルのパンティー貰うぐらいなら、俺が囁かな願いを
叶えて貰っても良いじゃないか！
くそう、ペンギン村は名残惜しいけど、そろそろ行かないと手遅れ
になる。
という訳で

「お世話になりました！」

「ほよよ？マーシユ君、どっか行くの？」

「うん、ちょっと出かけてくる。暫くすれば帰るよ」

「あらあら、寂しくなるわね」

「体には気を付けるんだぞ」

俺は今、則巻家の前で見送られている。

実は俺、この則巻家の世話になっていたのだ！

初めてアラレちゃん達に出会った日、スカウターを半分も喰われたのは今ではいい思い出だ。

「また、遊びにくてくださいでし」

「うん、ありがとう。ターボ君」

実はこのターボくんスカウターを修理して貰ったりします。

0歳の赤ん坊だが、超能力も使える天才児なのだ。

この子にはマジで世話になったな！

自分が天才なことを鼻にかけないし、父親のフォローまでこなす。よく出来たお子様なこと。

センベエさん、みどり先生、アラレちゃん、ガッチャン×2、そしてターボくん。

今までありがとうございました！

絶対にまた来ます！

「それじゃあ元気で！」

また何時かペンギン村に来よう！

俺はそう決めて、舞空術で飛び立った。

目指すはパオズ山だ。

続く？

外伝・寄り道（後書き）

という訳で、ペンギン村からでした！
如何でしたか？

かなり短くてすみません。

次こそは、悟空を出そうと思います。

ピチピチギヤルでも汚いものは汚い！きちやない！（前書き）

遂に悟空と合流。

単行本一巻、何処を探しても見当たらないから、思い出しながら書きました。

台詞とか展開、間違ってたらすイマセン。

山賊が先だっけ？カプセルハウスでの一泊が先だっけ？

ピチピチギヤルでも汚いものは汚い！きちやない！

どうも、マーシユです。

現在俺は、あの有名なパオズ山に來ています。

早速、悟空に接触しようとしたのですが…。

初めから躓いています。

いや、悟空の家を見つけたまでは良かったんですがね。

中は既に蛻の殻。四星球もありませんでした。

既にブルマと旅だった後ですね。はい。

「やべっ！完全に出遅れた！」

本気でヤバイ。

悟空の気を探ろうにも、この状況じゃ無理だ。

確かこの時点の悟空の戦闘力は僅か10。

悟空の強さはパオズ山の猛獣相手では敵無しなんだろうけど、俺にとってはドングリの背比べ。

一桁から二桁の戦闘力なんて、目の前ならともかく遠くにいる状態で見分けるなんて無理だ。不可能！

スカウターで探そうにも、どれだけ生き物が生息してると思っただ！？

無数の生物の中から悟空の数値を探すなんて絶対に無理だ。

ん？

俺が今の状況に頭を抱えている時だった。

遠くのほうで悲鳴が聞こえた気がした。

若い女の声だ。

そちらに目をやると…。

「きゃあああああ！！た、助けてえっ！」

でっかいプテラノドンが大空を飛翔していた。
その足には獲物、もとい女の子の子を捕まえている。
何処かで見たとような光景だな。
って、そんな場合じゃない！

俺は舞空術で浮かび上がると、プテラノドンに向かって猛追。

「おりゃ！」

「グウエエツ！？」

どてっ腹に軽く拳を叩き込んだ。

「えっ！？きゃあああああああ！！！」

プテラノドンは、一撃のもとに生き絶え、女の子を手放した。
俺は落ちて行く女の子を追いかけると、空中でキャッチした。

「つと、あぶない、あぶない。大丈夫か？」

「え、ええ」

よく見ると、かなり可愛らしい娘だ。

緑の髪を三つ編みに纏めた大きな瞳の女の子。

年は一六、一七歳くらいか？スタイルもかなり良い。

「えっと、助けてくれてありがとう」

「いや、それはいいけどさ、どうしてこんな……ん？」

女の子を抱えている俺の手に生暖かいモノが…。
ナニコレ？

水？

なにか垂れてきてる…。

「これはもしかして…」

「あ、ああ、あうあう…」

「お、おい！落ち着け！」

女の子は目に涙を浮かべる。

ヒック、ヒックとシヤクリ上げ…、ヤバイ泣く！？

「ああ〜ん！結局オシッコ漏らしちゃった〜」

大泣きを始めた。

取り敢えず、下ろすか。臭うし…。

俺が女の子を下ろしたその時だった。

「お〜い！ブルマー！」

ブロロロ…。

遠くからバイクに跨った少年が現れた。

背中に赤い棒を挿した道着姿の少年、尻尾もある。
間違いない。

この子は

「孫くん！何やってたのよ！もう！」

「わりい、わりい。このばいくつてヤツを動かすのに手間取つてよ」
そこで少年は此方に気づく。

「孫くんもお礼言いなさいよね。彼が来てくれなかったら今頃私、食べられちゃつてたかもしれないのよ?」

「オッス!オラ、孫悟空だ」

「あ、ああ。俺はマーシユだ」

やはり孫悟空か。

俺は動揺を隠しながら、悟空に挨拶した。

それにしても良かった。

この様子を見るに旅立ったばかりのようだ。

なんかご都合主義が続いてる気がするが、良しとするか。

「へえ、旅かー、なんか面白そうだな」

「オラもだ。パオズ山の外は初めてだから、ワクワクすつぞ」

ブルマが漏らしてしまった為、彼女が着替えている間、俺は悟空と二人で話をしている。

「でもさ悟空、なんであの子、一人で旅なんてしてるんだ?この辺とかかなり物騒だろ?」

「ああ、ドラゴンボールちゅうのを探してるんだ？」

「ドラゴンボール？何だそれ」

悟空が馬鹿正直に説明してくれる。

普通、初対面の他人にこんな情報を話してくれない。

悟空、素直過ぎです。

「へえ、どんな願いでもか。凄いなあ。それに神龍だっけ？俺も見てみたいよ。そうだ！悟空、俺もボール探し、付き合わせて貰ってもいいか？」

「別にいいんじゃないか」

俺の頼みに、悟空はアッサリと同意した。

原作でも知っていたけど軽すぎる。

そこが悟空の良い所だけだ。

そうこうしている間に、ブルマが着替えを済ませて戻ってきた。

「お待たせ、あ、アナタ、まだ居たの？」

「あ、ああ。えっと、ブルマさんだっけ？俺はマーシユです」

ブルマは気まずそうに、顔を背けた。

確かに初対面がアレじゃあな…。

助けられた矢先に、その助けた相手にオシッコかけちゃったんだから。仕方ない。

俺自身もソツチ系趣味はない。

いくら相手が美少女とはいえオシッコ掛けられて喜ぶ趣味は無い。汚いものは汚いのだ。

「う、悟空から話は聞いたよ。ドラゴンボールの事も。それでなんだけど、俺も付いて行っても良いか？悟空は良いって言ってくれたんだけど」

「孫くん、話したの？」

「別にいいじゃねーか」

「あ、アンタ、軽いわね」

「ああ、勘違いしないでくれ。別に叶えたい願いはないよ。その神龍っていうのが見てみたいんだ。それに連れていつてくれるなら、道中、護衛くらいするよ」

「そうね。孫くんだけじゃ心許ないし、お願いしようかな」

「決まりだな。それじゃあ早速出発しよう。どっちに行けばいいんだ？」

「えっと」

ブルマはポケットからリーダーを取り出すと、ボタンを押した。

「それは？」

知っているが聞いておく。
取り敢えず初見は何でも質問する。
知らない筈の事を知っていれば怪しいのだ。

「ドラゴンレーダーよ。これでドラゴンボールを探すのよ」

「もしかして、特殊な電磁波をキャッチする装置か？」

「あら、そうよ。よく分かったわね。機会に詳しいの？」

「ああ、それなりにね」

「あっちね。それにしても、あ、あたしを助けた時、空を飛んできたわよね？」

「ん？ああ。まあ、超能力みたいなものだと思っててくれ」

「へえ。オメエ、空を飛べるんか？」

「ああ、こんな感じに」

俺は、ふわりと浮かび上がってみせる。

「スゲーな」

「はい、はい、そろそろ出発するわよ」

ブルマは強引に会話を終わらせると、悟空の乗ってきたバイクに跨った。

「行くわよ。ほら、孫くんも乗って。アンタは」

「マーシユでいいよ。俺もブルマって呼ぶから。あと、お構いなく」

付いていけるから。

俺はそう言つて、ブルマの出発を促した。

俺はブルマがバイクを発進させると、その後を舞空術で追いかけた。

夕暮れ。

かなりの距離を来た一行は、街道の横にある開けた場所にその足を止めた。

ブルマはバイクを止めると、カプセルケースを取り出した。

「そのなんとかっちゅうの、家まで飛び出してくるんか？」

「ホイポイカプセルよ。えっと、あつた」

ブルマがカプセルを取り出すと、悟空は慌ててその場から離れた。文明の利器に驚く少年。面白い。

BON!

そんな音を立てて、球体の家が飛び出した。

「おめえ、本当は妖術使いじゃねえだろうな？」

「あんた、野宿するの？」

という訳で俺達はカプセルハウスへ。

中は広く、とても持ち運びが出来る家とは思えない。

テレビやベッド、バスルーム。色々揃っている。

この世界の技術はチートだと思う。マジで。

ペンギン村には無いからな。
田舎だから。

「ところで孫くん、アンタ臭いわよ？ちゃんとお風呂入っているの？」

「オフロ？オフロってなんだ？」

「ぎゃー！不潔！」

それには同感。

悟飯さん、ちゃんと悟空に風呂を教えてあげて下さい。

そんな訳で、ブルマが悟空を風呂に入れてやる事に…。
俺は面倒だから断ったけど…。

「きゃあああああっ！！！」

呑気にテレビを見てたら風呂場から悲鳴が…。
行ってみると

「尻尾、尻尾がある…！」

「尻尾が珍しいんか？そっか、オメーは無いもんな。男には生えてるんだぞ」

「え、ウソ！？た、確かに男の人の生のお尻なんて今まで見たことなかったけど」

ブルマは俺の方を見てくる。
な、何だよ。見せないぞ。

ピチピチギヤルにお尻見せるってどんな罰ゲームだよ。
因みに今の俺は、尻尾は無い。

パオズ山に来る前に取っっちゃったのだ。

その気になればトカゲのしっぽ切りみたいに来るのだ。

勿論サイヤ人の戦闘服も身に付けてない。

下のピッチリスーツは着てるけど、上からジャケットを羽織っている。

見た目的には問題ない筈。

股間のモッコリも見えない。隠れてる。

とにかく今は無印だ。

Zからの世界観はお呼びじゃないのだ。

そのうち嫌でもZになるのだ。

今の内に平和でのほほんなドラゴンボールを楽しみたい。
まあ、嫌じゃないけど。

「いや、そんな目で見ても尻は見せないぞ」

「み、見たかないわよ!」

「でも、死んだオラのじいちゃんは生えてなかったなあ」

「そつでしょ!そつよね!」

「じいちゃんは、変わりモンだったからなあ」

「それはアンタでしょ!」

むう、これは面白すぎる。

原作読んでる時は意識しなかったけど…。
悟空のボケとブルマのツッコミは最高だ。
何でコイツら結婚しなかったんだろっ？

次はブルマが風呂に入るため、俺達は追い出された。

再び居間に戻りテレビを見てみると、悟空が風呂場に入っていた。
二人のやり取り、面白いから見に行きたいところだけど、流石に犯
罪者にはなりたくない。

溜息が漏れた。

その時

「きゃああああつ！痴漢 っ！」

「お約束だな」

悟空は頭や背中に石鹸やら洗面器やらを受けながら、風呂場から出
てきた。

首を傾げている。お子ちゃまめ。

「今度やったら警察呼ぶからね」

髪にドライヤーを掛けながら言うブルマ。

風呂上りだからか、結構色っぽい。そう思ったのは内緒だ。

「でもさ、ブルマ。どうして悟空が痴漢になるんだ？お子様相手に
大人げないか？」

「お子様ならね。コイツ、十四歳だって」

「マジ？」

俺が悟空に聞くと。

「ああ、オラの歳は十四だ」

本当は十二歳の癖に…。

まだ亀仙人に算数習ってないからな

自分の年を勘違いしてんだコイツ。

再度言うが悟飯さん、ちゃんと子供育てようよ。

常識ぐらい教えてやろうよ。

「オラ、腹減った」

悟空の腹の虫が鳴った。

という訳で、食事になった。

だが野生児はブルマの出した食事は口に合わなかったようだ。

一人で狩りに出かけてしまった。

もつと力の付く旨いもんを食わせてくれるとの事だ。

確か、オオカミだっけ？

地球生活も約一年。オオカミなら実は食べたことがある。

俺達サイヤ人は大食いだ。

食料を買おうとすれば直ぐに底をつく。

だから節約の意味も込めて、俺は自分が食べる食事は自給自足して
たのだ。

恐竜だったり魚だったり果物だったり、色々食べた。

原作読んだ人なら一度は思うだろう。

恐竜、食ってみたいって。

「アイツ、何処まで行ったのかしら？」

「さあ、その内に帰ってくるだろ？」

「言っとくけど、二人つきりだからって変なコトしないでよね」

「分かってるって。わはははは」

「こんな美少女が目の前にいるのに、それ以上にテレビに夢中になるなんて」

「仕方ないじゃん。出会いが会いだし」

「うっ！」

俺の言葉にブルマの顔が引きつる。

そして直ぐに怒り出す。

ヤベッ！ヤブヘビだったか。

「こ、これだから男って奴はデリカシーに欠けるのよ！」

よく言うよ。

男って奴はって言うけど、お前は男求めてドラゴンボール探してるんだろぅが！と思っっている事は、表情にも出さない。

取り敢えず謝っておこう。

遂とはいえ女の子に対する態度じゃなかった。拗れたら大変だ。

「すまん、失言だった」

「ふんっ！」

「ただいまー！」

そこで悟空が帰ってきた。

「結構、速かったな。何が捕れたんだ？」

「オオカミとムカデが捕れた。丸焼き、丸焼き」

口から肛門にかけて串刺しにされて吊るされているオオカミ。そして驚掴みにされているムカデを見た瞬間。

「ぎゃあああああああー！！」

ブルマが再び悲鳴を上げた。

本当に良く悲鳴をあげる娘だなあ。

そして

「なあ。本当に喰わねーのか？」

「うるさいわね！食べないって言ってるでしょ！」

「悟空、俺は貰うぞ。ムカデは要らないけど」

俺達二人はカプセルハウスの外で、焚き火を囲んで獲物が焼きあがるのを待った。

そして食事は終わり…。

「ふう、食った、食った」

明日に備え、眠ることになった。

悟空は嬉しそうにベッドのスプリングを楽しみながら言った。

「この布団、オラン家のと違ってフカフカだ！それにオラ、誰かと寝るのなんて久しぶりだ！」

「一緒に寝る？冗談じゃないわ！」

「別々か？」

「あつたりまえでしょ！十四歳だなんて知ったら！」

「じいちゃんのキンタマは、枕にするとフカフカで気持ちよかったんだけどな」

「アンタは私のタマを枕にするつもりだったんかいっ！」

ほんとうに面白いな。

や、止めてくれ！間近でこんな漫才を見せられたら俺…。

「ちょっとマーシユ！アンタ何笑ってんのよ！アンタのタマを枕にしてやりゃいいのよ！」

「おい、ブルマ。女の子がタマタマって連呼するなよ」

「うるさーいっ！とにかく、私は寝るから二人共寝室には入って来ないでよね！」

ブルマはそう言うと、ボタンと勢い良くドアを締めた。

「なあ

「俺のタマは枕にはするなよ」

念の為に悟空には釘を差しておいた。

「ちえ

「がっかりするんかい！

ああ、もう疲れた。精神的に。

今日は、もう寝よう。

俺はタンスからタオルケットは二つ取り出すと、一つ悟空に手渡した。

「今日はもう寝ようぜ」

「うん

こうしてドラゴンボール探しの旅、一日目は終わりを迎えた。

続く？

ピチピチギャルでも汚いものは汚い！きちやない！（後書き）

次回は亀救出から武天老師登場まで行きたいな
応援よろしくお願いします。

実は私、亀なんです（前書き）

今回は亀じいちゃん登場まで進めてみようと思います。

実は私、亀なんです

おはようございます。

マーシユです。

今日も良い朝です。

一夜明けて俺は、カプセルハウスを抜けだしていた。
ハウスの遙か上空で浮かんでいる。

「すうー……」

深呼吸する。

そして

「はあああああああつ！！！」

虚空に向かって殴る蹴る、肘打ち、手刀、回し蹴り！

毎朝の日課、トレーニングを開始した。

修行を怠るわけにはいかないからな。

今の現状では、これ以上強くなることは難しい。

だからといってサボると戦闘力が落ちる。

俺はこの世界の人間なら絶対に捉え切れない程のスピードで空を駆けまわった。

しかもその速度を更に上げていく。

程良く汗を掻いたところで訓練を終了。

俺は下に降りると、カプセルハウスに戻った。

「あれ？悟空がいない……ん？」

寝室にいるのか？

ドアを開けて俺は固まった。

なんと、悟空がブルマのパンティーをズリ下ろしているではないか！
バッチリ見てしまった。ごちそうさまでした！
毛も緑色です。

お下劣でスイマセン！

「ぎゃあああああああ……！！！」

そこで悟空が悲鳴を上げた。
流石にブルマも飛び起きた。

「何々！何なの！」

「た、タマがねえ！チ、チンもっ……！？」

「ド、ドラゴンボールが！？」

勘違いしたブルマは大慌てで、ドラゴンボールを確認する。
そして

「ちゃんと有るじゃない！寝ぼけないでよね！」

「一体何事だよ？」

コイツらは一緒にいるだけで、漫才やってるみたいだな。

とりあえず、話の中に入りたい。

「ちょっと聞いてよ。孫くんったら、寝ぼけてボールが無いっていうのよ」

「有ったのか？」

「当たり前でしょう？」

「ならいい。ところで、出発は何時だ？」

「ちょっと待ってて。準備するから」

そういうとブルマは顔を洗うと、化粧を始めた。
そして十数分後。

「なあ、まだか。おめえ、そんなにノロノロしているとカメになっちゃうぞ」

痺れを切らせた悟空が文句を垂れ始めた。

「うるさいわね！女の子は色々と時間がかかるのよ！」

「…体操でもしてくっか」

悟空は退屈だったのか、出て行ってしまった。

「あ、俺も行くよ」

面白そうなので俺もついていくことに。

外に出ると、悟空は準備運動をしていた。
そして走りだす。

ひとしきり走りまわると、近くにあった岩にしがみついた。
悟空よりも一回りほど大きな岩だ。

腕に力を込める。
そして

「ぐ、ぐぎぎぎっ!」

ドゴンッ!

岩は轟音を立てて砕け散った。

見てて微笑ましいな。

あんな修行やってるサイヤ人は見た事がない。

斬新な体操だなあ…。

岩を破壊した悟空は次の岩に狙いをつけた。
そして

「うわっ!」

「ん、岩が喋った」

悟空が破壊しようとしたのは岩ではなかった。

「カメ?」

亀だった。

悟空に抱えられた亀は、必死で逃れようのジタバタしている。
悟空の顔が驚愕に染まる。

「うわあああああっ!?!」

確かにこんな所に亀なんて珍しいけどさ。
驚き過ぎだろっ？

「あー、びっくりしたー」

亀は、はあはあと息をつきながら見を縮めた。

「あ、あいつ、ホ、ホントにカメになっちまった」

悟空が初対面の亀に話しかけてる。

「おめえがノロノロしてるからだぞ！」

どうやらブルマが亀になったと本気で思っているらしい。
凄い天然だ。

「今度はなんなのよ？つて、何よそれ、亀？」

ブルマが騒ぎを聞いて家から出てきた。

「あれ？オメエじゃねえのか？」

「アホ」

朝から漫才とは魅せてくれる。

「でも、これ海ガメよね？何でこんな所に？」

ブルマの疑問も当然だ。

こんな山の近くに海ガメがいるなんて、普通は思わない。

なんでここに居るんだ？

えっと、駄目だ。こんな細かい事まで覚えてねーよ。

「す、すいません。塩水を一杯くれませんか？出来ればワカメも添えて」

「贅沢な亀ね」

文句を言いながらも、ブルマはバケツいっぱい塩水にワカメを添えて出してやった。

亀は嬉しそうに塩水を飲み干すと、一息ついた。そして言った。

「あ、ありがとうございます。………実は私、亀なんです」

「見りゃ分かるわよ！」

「海ガメなのに松茸狩りに来たのが運の尽きで……」

そういえばそんな理由だったな。

俺は海ガメの話に耳を傾けながら、バケツに塩水を汲んでやる。

仲間とハグレたり道に迷ったりと、踏んだり蹴ったりだったようだ。

もう一年も海を求めて彷徨っているんだとか。

探してやれよ亀仙人。

「海ですって？てんで方向違いじゃない！」

話を聞いたブルマが、マップを取り出した。

「えっと、ここから南に、約120公里」

「ひゃ、120キロですか？」

「カメにはキツイ距離だな」

俺はそう言いながら、お代わりの塩水を出してやった。

「なあ、オラたちが、そのウミってとこに連れてってやるうか？」

悟空…。

お前ならそう言っただろうな。
やっぱり良いやつだ。

「ほ、本当ですか!？」

塩水を飲んでいた海ガメは、嬉しそうに身を乗り出してきた。
そこでブルマのツッコミが入った。

「なに言ってるの? ジョーダンじゃないわ! あと30日しかないのよ? そんなことしてる暇はないわ!」

ブルマの冷たい言葉。

確かに当然の反応だけども。

そういえば、ブルマは高校生だったな。
夏休み中って設定だったな。

俺は既に空になったバケツを持って家に入った。

「のんびりしてたくせに」

「時間の無駄だわ、ほっときなさいよ」

「じゃあオラだけで行ってくる」

「勝手になさい！そのかわり二度と私達の前に顔を見せないでちょうだい！」

カメを背負う悟空に向かって、ブルマは叫んだ。

「アホー、イナカモーン！帰ってくるなー」

バケツを家に戻して出てきた俺が見たのは、カメを背負って走って行く悟空の背中だった。

そして隣ではブルマが面白くなさそうに、鼻息を鳴らしていた。

「一緒に行かなくていいの？」

「ふん、別にいいわよ！あんなガキ！」

「ふーん、じゃあな」

「じゃ、じゃあなつて？じゃあなつて何よ！？」

「ブルマは行かないんだろ？俺は悟空を追うことにするわ」

短い付き合いでした。

俺は爽やかに笑うと、じゃ、と手を上げた。

「ちよ、ちよっと、あんたは私の護衛でしょ？」

「あれ？悟空もそうじゃなかったか？」

「う」

「それに、ボールの一つはあいつが持つてるんだろ？」

俺の指摘にブルマが悔しそうに唸る。

「それに、あれ」

俺が指を差した方にブルマが視線を移した。

ズシン、ズシン！

ギヤア、ギヤア、ギヤア…。

「……………」

視線の先には、大型の肉食恐竜がのっしのっしと歩いている。

空には、昨日出くわしたような翼竜が飛んでいた。

ブルマは無言になる。

一人で行動する事の危険性を理解したようだ。

確かに銃とか持っているけど、恐竜相手に通じる訳ないしな。

というか、よく一晩無事だったな。カプセルハウス。

「一緒に行こうぜ」

「そ、そうね。しょ、しょうがないから私も行ってあげるわ」

素直じゃないな。

一人じゃ怖いくせに…。

「はいはい、ありがとうございます。お嬢さん」

ブルマはバイクに跨ると、エンジンを掛けた。悟空を追って走りだす。

「俺も行くか」

舞空術で追いかける俺。

「悟空、待ってくれよ。俺も行くって」

俺達は直ぐに悟空と合流。

マップに習って、南を目指して走り始めた。

走り始めること数時間。

相変わらず悟空はカメを背負い、ブルマは並行するようにバイクを走らせていた。俺はというと、悟空の少し上を飛んでいる。

岩山に囲まれた街道。

空を飛ぶ始祖鳥が見える。のどかなー！。

その時だった。

「いいもの持ってるじゃないか？」

岩陰から、ぬっと巨体が現れた。

毛皮に覆われた体長4〜5メートルはあるつかという巨体鎧に身を包み、手には鈍い光を放つ巨大な刀を持っている。

山賊ウルフだ。

通り掛かった旅人を襲う典型的な賊だ。

言うなれば唯の雑魚だな。
ブルマとカメはめっちゃ怯えてるけど。

「おう、ボウズ！その海ガメを寄越しな！好物なんだよなーっ！」

「ひ、ひいっ！ど、どうぞ！…お、お渡しして孫くん」

「べー」

「同じく、べー」

俺は悟空の味方だ。

多数決で、亀は渡さないに決定！

「ほほう、逆らおうってのか？カメを置いていけば死なずにすんだものを」

「バ、バカ！カメくらい上げなさいよ！アンタ何考えてんの！」

「お前なんかにはやらないよー」

「そっだ！そっだ！帰れ、帰れ！」

「そっという事ならまずお前からいたただこうか」

山賊ウルフが刀を振り上げた。

悟空は戦うつつもりだ。海ガメを背から下ろしている。

「そりゃあー！」

振り下ろされた剛剣、これを跳躍で避け背後に降りる。

「おーい」

戦っている時の悟空は本当に楽しそうだ。

イキイキしている。

俺も自然と笑みが漏れた。

「ぐへへ、素早いじゃねえか。よく俺の剣を躲したな」

典型的なやられ役の台詞です。

片目に傷もあって、見た目の迫力はあるけど…。

そつえば昔のゲームでもザコキャラだったし…。

「い、今のうちだわ！逃げるのよー！」

あ、いつの間にかブルマがバイクに跨っている。

必死にエンジン掛けるよ。

もう少し落ち着けばいいのに…。

まあ、天才とはいえ唯の女子高生だし仕方ないか。

「でえいー！」

お、そうこうしている間にウルフが続けて悟空に襲いかかった。

悟空は剣を躲すと、その剣の上に降り立った。

「やっほー」

そしてウルフの鼻の上に飛び乗る。

あ、出るぞー！

あの有名な技が！

「ジャーン拳！！！！」

悟空は中腰で構えから、正拳を繰り出した。

「グーッ！！！！」

ベキッ！！！！

悟空の拳が鈍い音を立てて山賊ウルフの米上に突き刺さった。

「あ、あへ…」

悟空はピースしながら山賊ウルフから飛び降りた。

山賊ウルフは、米上から血を流しながら倒れ、生き絶えた。

「す、すい…」

「あ、あんなに強いのか？あ、あいつ…」

海ガメとブルマは、逃げるのも忘れてポカーンとしていた。

二人は我が目を疑っていたのだ。

まさか、こんなお子様が、これほどの力を持っているとは…。

「ふむ」

俺はスカウターで二人の差を確認していた。

こういう時、考察は必要だろうか？

悟空と山賊ウルフの戦闘力はそれほど違いはない。

ほんの少し悟空の方が上なだけで…。

やっぱり戦闘力の差は絶対って訳じゃないよな。俺も油断しないようにしないと。

因みにジャン拳、使ってる時の悟空。戦闘力が13だった。3上がっていた。

山賊ウルフの戦闘力は6。

素早さとか耐久力、技能まで計算に入れないからな。スカウター。あくまでエネルギーを計測しているだけ。

「おまえ、ほんとうに美味しいのか？」

俺が一人考え込んでいると、悟空が意味が目を見つめながら聞いた。あれは、捕食者の眼だ。

海ガメは身の危険を感じたのか、慌てて弁明し始めた。

「お、おいしいわけじゃないですよ！め、めちゃうちゃ不味いって評判で！」

「そうだな、あんまり美味そうじゃないもんな」

悟空は、ほっとしている海ガメを再び背負い直すと、再び海へ向けて走りだした。

そして

走ること約3時間。

風に乗って潮の香りがしてきた。そして波の音。

俺達は遂に海へとたどり着いた。

本気で飛べば5秒と掛からなかったけど…。

「や、やりました！う、海ですよ！誰がなんと言おうと海ですよ！」

海ガメは水平線の向こうに向かって叫ぶ。
本当に嬉しそうだ。

「す、すげえー！な、なんちゅう広い川だ！」

はい、名台詞！

実は俺、この台詞が聞きたかった為に、同行したようなものだよ。
ていつか名台詞は全て抑えてみせる！

目指せ！名台詞コンプリート！

「おめえ、広いところに住んでんだな」

「あ、ありがとうございます！ありがとうございます！」

海ガメは目に涙を浮かべながら、何度も頭を下げている。
なんか良いな。こつこつというの。感動する。

「良かったな」

「あ、あの、ちょっとここで待っていてくれませんか？是非お礼を
！」

「お礼？」

「玉手箱じゃないでしょうね？」

浦島太郎、この世界にもあるんだ。

カメが海に入っていくのを見送りながら俺は心の中で突っ込んだ。

亀仙人登場まであと少しか…。
ふう、少し時間を潰しますか。

「う、うげー、かれえ！ペペッ！なんだこの水！」

悟空くん、初めて海に入った子供のお約束を…。

俺も昔やりました。

ブルマも海に足を入れた。パジャマの裾を少し持ち上げて呟く。

「こんな事なら水着でも持ってくるんだったわ」

「そうだな。こんなに綺麗な海、泳がないと損だよな」

俺も同感。

泳ぎたい。水着じゃなくても問題ないけど今は自重。
そして海と戯れること十数分。

「ん？」

俺はこの地球だと強めの気を感じ取り水平線に目を向けた。
来たか、亀仙人。

「どうしたんだ？」

「誰か来る」

「ほんとだ。さっきのカメ、上に人を乗せてら」

「あなた、あんなに遠くにいるのによく見えるわね」

ブルマは悟空の隣で、じつと目を細めている。
そして、

「おまたせしました！」

「ハロー！」

サングラスの爺さんを背中に乗せて帰ってきた。
武術の神と謳われる武天老師だ。

背中に甲羅を背負ったアロハシャツの老人。
見た目は唯のファンキーなジジイだけど…。

「派手な爺さん」

流石のブルマも驚いたようで、ポカンとしていた。
よっころしよと亀仙人がカメから飛び降りる。
その様子を伺いながら、俺はワクワクしていた。
これから始まる漫才、じゃなかった。やり取りを。
あ、カメラ忘れた。

続く？

実は私、亀なんです（後書き）

感想は私の栄養分です。

無ければ死にます。

あと、意見やネタ技とか大歓迎です。

世界観を壊さないなら可能な限り取り入れたいと思います。
是非宜しく！

ところで悟空伝3って知ってます？

山賊ウルフにリカント、うさぎ団、大牛。

初めのザコキャラ…。

クソカードだと速攻で死にます。悟空が。

悟空HP16（笑）

マージン設定（前書き）

5話突破という事で設定です。

マーシユ設定

- 【名前】マーシユ
- 【種族】サイヤ人
- 【年齢】二十歳
- 【戦闘力】180万（1800万）
- 【身長】173cm
- 【体重】79kg

このSSの主人公。

ひよんな事からサイヤ人に転生した元・日本人色々あつて十歳の時、一族を出奔。惑星ベジータを脱出した。

その後、約十年間、様々な星を渡り歩き、戦士として大きく成長した。

体型は中肉中背。

典型的な東洋系。

美形というより精悍な顔立ち。

技能

超人クラスの気の制御が可能。

界王拳（倍率は十倍まで。無理をすれば更に上げられる）

気功波（惑星破壊が可能、曲げられるし足からも撃てる）

光線波（指先に気を集中して放つ貫通力の高い気功波。どどん波）

気円斬（格上キラーとして習得。連続で撃てるし操作可能）

気光剣（気で作った剣。ベジットのエネルギーソードのパクリ）

気弾（一瞬で無数に撃てる。自在に操作も可能）

舞空術（物凄く早い。数分で地球を一周）

大猿パンチ（大猿のオーラを背後にしながら突進）

格闘術（知識にあるなんちゃって格闘技。一応カッコはついてる）

残像拳（多重残像拳も出来る）

パワーボール（満月を作り出して巨大猿変身！但し尻尾がないと無効）

????（ヤードラットで教わった超能力）

マージン設定（後書き）

気功波の名前とか無いです。

どうしてよっ？

その名は亀仙人（前書き）

沢山の感想を寄せていただきありがとうございます。ありがとうございました。
ハチャメチャ嬉しいです。

その名は亀仙人

グッドアフタヌーン、マーシユです。

今俺達の前には、あの有名な亀仙人がおります。

「カメを助けてくれたそうじゃな」

「じいちゃん、なにもんだ？」

「わしは亀仙人じゃ」

水辺線をバツクに自己紹介する亀仙人。
なんか様になつてる。

「助けてくれたのは誰じゃ？」

「お坊ちゃんです」

「そうかそうか。ごくろつさんじゃったな。お礼に素敵なプレゼントをあげちゃおう」

「プレゼント？」

亀仙人は杖を天に掲げると空に向かって叫んだ。

「来いっ！不死鳥よっ！！！」

シーン…。

待つこと十数秒。

しかし何も現れなかった。

「何も、こないわね」

「うん、こないな」

俺とブルマのジト目に亀仙人はたじろいた。
カメが思い出したように言った。

「あー、不死鳥のやつは食中毒で死んだのでは？」

「おいおい、食中毒って」

「不死鳥なのに死ぬの？」

「そうか！そうじゃったな！」

おいおい、しっかりしてくれよ。亀仙人のじいちゃん。
亀仙人は不死鳥の力で悟空に不老不死を授ける気だったようだ。
俺も欲しかった。不死はいらんけど、不老は欲しい。
亀じいちゃん、少し考え中。
そして

「来るんだ！筋斗雲よっ！！」
すると。

「雲が飛んできた！」

わたあめのような黄色い雲が、声に導かれて飛んできた。

2〜3人なら乗れそうなくらいの大きさの雲。
心なしか、自分の意志を持っているように見える。

「どうやって食うんだ」

「ありがたい雲を食うな！」

悟空…。

確かに食えそうだけども。

サイヤ人って基本的に動くものは何でも食うからな。
人形の宇宙人でも食べるし。俺は喰わないけど。

「筋斗雲に乗れば意のままに空を飛ぶ事が出来るのじゃー！」

「へー、空を飛べるのか！」

悟空がうれしそうに身を乗り出して聞く。

あの、俺も飛べるんですか？

俺が飛べる事、忘れてない？悟空さん。

「すごいじゃろ？但し筋斗雲は清い心を持ってないと乗ることは出
来ん」

「へー」

「どれ、まずわしが見本を見せてやろう」

亀仙人が筋斗雲に飛び乗った。
だが。

スポッ！

ゲキツ！

「あ、あたた！こ、腰が！」

「だ、大丈夫ですか！」

亀仙人の身体は見事に雲をすり抜けて地面に落ちた。亀が心配そうに腰を摩る。

ブルマはその様子を見て爆笑中だ。確かに面白いけどさ…。ヤベ！俺も笑みが漏れてる。

「オラが乗ってみる！」

今度は悟空が筋斗雲に飛び乗った。

とん、そんな音を立てて、悟空の足は筋斗雲に触れた。

「お、乗れたなー」

乗れたことにはしゃぐ悟空。

それにしても筋斗雲さんよ、シビアすぎだよ。

亀仙人だって基本的に善人だろ？

乗せてやっても良いじゃねーか。

面白かったからこれでいいけど…。

「それ！」

悟空は早速、筋斗雲を操り大空を飛んだ。

そしてひとしきり飛び回ると亀仙人にお礼を言った。

「どうもありがとう！」

「うむ。あっぱれ。中々の雲さばきじゃ」

そして嬉しそうに再び大空へ飛んでいった。

「ねえ、おじいさま！わたしにもアレちょうだい！」

悟空を羨ましく思ったのか、ブルマが亀仙人に筋斗雲をねだり始めた。

その気持ちは分かる。

亀仙人は亀に問う。

「そのギャルもお前をたすけてくれたのか？」

「いえ、全然」

「何よ！塩水あげたじゃない！」

「いや、ブルマさんよ。ソレは無理があると思っな」

「あんだ、どっちの味方よ」

いや、塩水とワカメじゃ筋斗雲と釣り合わんだろ？

悟空は命の恩人だし。

ていうかブルマ。山賊ウルフにカメ差し出そうとしてたじゃん。むしろ命の恩人とは逆じゃね？

流石に、このあたりの事は黙っておくが…。

「あいにく筋斗雲はあれひとつでな、かわりに何かやっても良いのじゃが」

但しと続ける。

そして亀仙人の表情がみるみるうちにエロくなっていった。

「パ、パンティーを見せてくれたらな」

あ、背後にパンティーが見える。

ブルマが顔を赤くしてうるたえた。

「え？パ、パンティー！？」

亀仙人がこくりと頷いた。

さすがに初対面ではどつかんのか？

次回から遠慮がなくなるからな。

亀仙人のエロイ要求に、カメが真っ先に意義を唱えた。

「せ、仙人ともあろうお方が何ということを！」

「いいじゃない！仙人だって偶にはパンツくらい見たいわ！」

「筋斗雲に乗れなかったわけが分かりましたね！」

「だまれ！」

これってやっぱり漫才だよ。

俺は少し離れたところで様子を伺っている。

だって面白いし。

それにこれからの事を見逃す訳にはいかないし。

それにしても、筋斗雲、やっぱり敵しいな。

エロいくらい良いじゃないか。

そんなんじゃないや世界中、殆どの人間が乗れないって。
まあ、亀仙人は物欲とか金欲とかも有りそうだけど。

「い、いいわ。それぐらいなら、なんとか」

ブルマは頬を染めて同意した。

うーむ。可愛いんだけど、話の内容が…。
そして

「はい！」

おお！

豪気だな。勢いいいし。

ブルマはパジャマの裾を掴むと勢い良く引き上げた。
うむ！すっぽんぽんですね。

マジでカメラ持ってくるんだった。

お、亀じいさんにはシゲキが強すぎたか？
鼻血吹き出してら。

「きゃ！恥ずかしい！」

ブルマが赤くなった顔を手で覆った。

いや、気づけよ。パジャマの下は暴れん坊將軍だよ。

「み、見たかいまの！思わぬ収穫だったな！」

「仙人様！」

「うんうん、最近の娘は凄いね。まさか俺もあんな」

俺も会話に加わって盛り上がった。

「で、何をくれるの？」

ブルマが嬉しそうに振り向いた。

「え、あ、ああ。そうじゃな」

何も考えてなかったな。じいさん。

筋斗雲や不死鳥と、珍しいものを持っている爺さんだ。さぞかし凄いものに違いない。

ブルマの期待はこんなところか。まあ、そのカンは当たってるけど。

「ブルマ」

「何よ」

「あれ」

俺は爺さんの胸から下げられているモノに指を向けた。

ブルマもソレを見て。

「あーっ！……！」

「気づいたか」

「ね、ねえ！それ！ちょっと見せて……！」

「え？わしのブリーフ？」

「そんなもん見たかないわよ！首から下げてるやつよ！」

「え？これ」

亀仙人は首から下げていた物を外して、ブルマに手渡した。ブルマはソレを覗き込むように確認する。星が三つ入った珠。間違い無い。ドラゴンボール、三星球だ。

「ちょ、ちよつと！孫くーん！」

ブルマが大慌てで、空を飛んでいた悟空を呼んだ。飛んできた悟空もドラゴンボールを見て驚いたようだ。

「あーっ！？ドラゴンボールだ！」

「ね？ね？」

「星三つだから三星球っちゅうやつだな」

「ラッキー！海の中だったら見つけるのが大変だったところよ！」

「じいさん。ブルマはアレが欲しいってさ」

「ソレをやるとはまだいつとらん」

「いいじゃない！ほら！ほらっ！ほらっ！ほらっ！……」

ブルマはせがむように声を上げてパジャマの裾を何度も上げて下を晒す。テンション上がりすぎだろ。
羞恥心、完全に忘れてねーか？
いや、俺も嬉しいけどさ。

「よかるう、あげる」

じいさん、その気持ち分かるよ。
あそこまで魅せてくれれば、何でもやりたくなるよな。
悲しい男の性。じいさん枯れてない。現役だよ。

そんなわけで四つめのドラゴンボールを手に入れた俺達。
ブルマのカプセルハウスまでの道に戻っていた。

「ほら！カメ助けてよかっただろ？」

「偶然だけどね」

そして何事も無くカプセルハウスに到着。
ブルマは着替えにカプセルハウスの中に入っていった。
そして。

「ぎえええええええっ！パ、パンツがーっ！！」

カプセルハウスが飛び上がる勢いの悲鳴。

ああ、やっぱりこうなったか。

俺は悟空と一緒にカプセルハウスへと入った。

ブルマは遂に自分が履いていなかったことに気づいたみたいだ。
もっと早くに気づけよ！

「そう気にすんな！チンやキンタマがなくなっただって生きていけら

「ど、どういふこと？」

「今朝見ちゃったもんね」

「ま、まさか！アンタがパンツ脱がしたの？」

「パンツって何だ？」

「これよ！！！」

ブルマは自分のパンツを悟空の前に突き出した。

「ああ、オラがとった」

「なんだ、俺はてっきりノーパン健康法か、趣味かと思ってた」

「っ！？」

プツン！

何かが切れた音がした。

そんな気がした、のは気の所為では無かった。

ブルマはいつの間にかマシンガンを手に使っていた。
ガチャッ！

スライドを引いて、此方に銃口を向けた。

そして

ドパラタタツッ!!!

銃を乱射するブルマさん。

ていうか突っ込みにしてはやり過ぎでしょ？

俺や悟空じゃなければ死ぬよ。

悟空はモロに背中に銃弾の雨を受ける。

「あたたたっ!!!」

俺は涼しい顔で銃弾を受け止めていた。

着替えが終わり、ハウスをカプセルに戻した。

ブルマは顔を赤くしながら、カプセルをケースにしまう。

「今度パンツとったら、しょうちしないからね！」

「まあ、まあ、子供のすることだから」

俺が嗜めると、ブルマはキッと此方を睨みつけた。

「アンタは大人でしょうが！よ、よくも！よくもアタシの！」

ブルマは涙を浮かべた目で睨んでいる。

確かに気持ちはわかる。

亀仙人のじいさん、そして俺。思いつきり見られたからな。

「お、落ち着け、ブルマ。俺が悪かったって」

とりあえず宥めておこう。

俺はブルマの肩に手を置くと、ゆっくり銃を下ろさせて言った。

「忘れるからさ。もう、完全に忘れた。俺は何も見えてない！」

更にブルマの眼がきつくなった。

そして。

飛んできたのはブルマの平手打ちだった。

このままではブルマの方がケガをする。

仕方ないな。

俺はブルマの平手が当たる瞬間、自分の気を限界ギリギリまで下げた。

パシィッ！

俺の頬にくつきりと赤いモミジが刻まれました。

ブルマを宥めること数分、気を取り直して旅を再会。

ブルマはカプセルケースをしまつと、筋斗雲を見て言った。

「あんたの筋斗雲で行った方が速そうね。乗せてよ」

「だめだよ。じいちゃんの良い子でないと乗れないって言ってたぞ」

「失礼ね！私はいつも清く正しいわよ」

いや、それはないだろう？

そんな訳でブルマは筋斗雲に乗ろうとするが。

スカッ！

亀仙人の時と同じだった。

すっぱぬけて地面に激突した。

ご愁傷さま。

「どうしてかしら？美しすぎるのも罪なの？」

カメを見捨てようとしたり、山賊に差し出したりしようとしたりと、自分の行動を鑑みる。

心の清い良い子は、そんな事しないでしょーよ。

結局、ブルマはバイクで、悟空と俺は飛んでいくことになった。
遅いな

「五月蠅いわね！アンタ達、スピード違反よ！」

目指すは次のドラゴンボール。

俺達は西に向かって走りだした。

続く？

その名は亀仙人（後書き）

という訳で六話目です。

如何でしたか？

実は五話目と同時に出来上がっていたのですが、結構書きなおしたりしたので結局一日掛かりました。

書きたためにもあんまり意味ないですね。

結局直しが入りますから。

という訳で七話、頑張ります。

マーシュ君、中学生ですかー（前書き）

ウーロンの支配する村に到着する前のお話です。

後の伏線にしようと思って書きました。

唯の原作沿いだと、アレなんで恋愛話でもテコ入れしようとして…。
凄く短いです。

マーシユ君、中学生ですかー

「ねえ、聞きたいことがあるんだけど」

「どうした、ブルマ？」

亀仙人と別れた日の夜。

一行はカプセルハウスで一日の疲れを癒していた。

お子様の悟空は一番早くに寝息を立て始め、二人が残った。

ふとブルマが、マーシユに問う。

「あんたって、何している人？」

「急にどうしたんだ？」

「孫くんは、あの通りの野生児で仕方ないけど、あんたが何者なのか、まったく分からないのよね」

「そりゃそうだ。話してねーし。でもそりゃお互い様だろ？」

ブルマにしても異常だ。

高額なタイプのホイポイカプセルを湯水の如く用いて旅をする少女。普通の一般家庭で、これほどの数のカプセルを購入、ましてや子供に持たせる親などいないだろう。

マーシユの疑問にブルマは当然のように答えた。

「あたし、お嬢様だもん」

「お嬢様、ねえ」

ブルマの答えに、マーシユは胡散臭げに見つめた。
原作知識からそれは知っていたが、ブルマの立ち振る舞いは、お嬢様とは程遠いと思う。唯一それっぽいところといえば、超我儼なところぐらいだ。

「何よ」

「別に、なんでもない」

「それで、あんたは？」

「はい？」

「話すこととか色々あるでしょ？歳は？」

「この前、二十歳になったとこ」

「へえ、誕生日は？」

「先月だった…、どうしたんだよ、やぶからぼくに」

マーシユは、ブルマの態度に戸惑いを覚えた。

ブルマは、マーシユに興味を持ち始めたようだ。

一応、命の恩人であるし、不可思議な力を持っている。

あの力は旅で必ず役に立つ。だからこそ同行を許可したのだ。だが、目の前の男は巫山戯るばかり。

おまけに自分は最大の恥辱を晒してしまう始末。

良い事が悪い事は別にしても、嫌でも意識してしまうのだ。そうになると、段々と気になって仕方がなくなってしまう。ブルマは無意識の内に、マーシユという男を知ろうとした。

マーシユ自身にその気は全くない。

自分が原作キャラと関わるには、自分というキャラクターは濃すぎると理解しているからだ。それに未来のこともある。下手をすれば将来、生まれるはずだった人物が消えてしまう可能性がある。

だからこそ、ブルマの態度に戸惑ってしまうのだ。マーシユは想定外の事に弱いようである。

「で、どうなのよ」

マーシユが気がつけば、ブルマは目の前で自分の顔を覗き込んでいた。

思わず可愛いと感じてしまう。

ブルマは風呂上りで、Yシャツ一枚に下は短パンだ。

シャンプーとコロンの香りが更に、マーシユの動悸を激しくさせた。

「や、ゴメン。聞いてなかった」

「だから、あんたが何者で、何処から来たのかって聞いてんのよ！」

「あぁっと、俺は宇宙人で他の星から来ました？」

思わず正直に答えてしまうマーシユ。

ヤバイ！そう思って訂正しようとした。

だが

「あんだ、私のことバカにしてるでしょ？」

「え？」

「もういい！寝るっ！」

急に不機嫌になったブルマは、寝室に引っ込んでいった。

「正直に答えたのになー」

信じて貰えなくて良かった。

筈なのだが、マーシユは何処か寂しそうに呟いた。

「少し、頭を冷やすか」

マーシユは外に出ると、夜空を見上げた。

「三日月…、もうすぐ満月か…」

一度目を瞑った。

そして

「あーっ、もうっ！かわええなあ！ブルマは！」

マーシユは遂に顔をニヤケさせて悶えはじめた。
どうやら先程のブルマを反芻していたようだ。

既に成人した男性が、中学生男子のようである。

「くそーっ、アレが一度はヤムチャのもんになるのかーっ」

納得いかねー。

マーシユ、二十歳。童貞である。二十歳になって尚、童貞です。大事なので繰り返しました。

そう、マーシユは異性に縁がないまま成人してしまった不幸な男子でした。

戦いが三度のメシよりも大好きなサイヤ人にしてみれば珍しくもないのだが、このマーシユ、皆さんが忘れていなければ、精神は現代日本人である。

その悩みはかなり切実なのだ。

「あー、彼女が欲しいよーっ」

マーシユは月に向かって吼えた。

ブルマは、ベッドにうつ伏せになって、マーシユの事を考えていた。カプセルコーポレーションの令嬢として何不自由なく生きてきた。

父親からは天才的な頭脳を、母親からは美しい容姿を受け継ぎ、順風満帆の人生を送っていた。

自分も年頃の女の子だ。

恋愛には大いに興味がある。

だが、周りの男達は駄目だった。

いつも打算的な感情を持って自分に近づいてくる。

男性と付き合ったことはあるのだが、やっぱり自分には合わず長続きしない。

ドラゴンボールの事を知ったのは、そんな時だった。

ブルマは思った。理想の恋人がいらないなら、神龍に頼めば良いと。

そんな訳でブルマはボール探しの旅に出ることを決意したのだった。しかし旅は甘いものではなく、自分一人だけでは達成できないと痛感させられた。悟空とマーシユと出会ったのはそんな時だった。

「確かにアイツは命の恩人だけどさ」

ブルマは最近、マーシユの事が気になっていた。出会い頭にオシッコを掛けてしまったのは悪かったと思っている。だが、それ以上に自分の醜態を見たマーシユに腹が立つ。

「ああ、もう！なんでこの私が、あんな奴のことで悶々としなければやなんないのよ！」

ブルマとマーシユ。

互いの心の中など知る由もなく、夜は更けていく。

約一時間後、マーシユが戻った時には、ブルマはスヤスヤと寝息を立てていた。

「ったく。眠っていれば中身は分らんわな」

そっと布団をかけ直してやると、明かりを消して寝室から出た。マーシユはソファーに横になると、目を瞑った。

続
く

マーシュ君、中学生ですかー（後書き）

今回はここまで。

次回はウーロン登場です。

恋愛は難しいです。

仔豚さん、危機一髪！（前書き）

ブタさん登場！

猪八戒じゃないよー

すこし原作沿いに戻ります。

仔猪さん、危機一髪！

んちゃ！

マーシユです。

早くもペンギン村が恋しくなってきたマーシユです。

亀仙人と別れて三日目、俺達はある村にたどり着いていた。

リーダーの反応を見る限り、この村にドラゴンボールが有るはずだ。

「こんにちは！だれかいますかーっ！！？」

ブルマが村に呼びかけてみるが反応なし。

気配はあるので間違いなく人はいる。

村にあるどの家にも鍵が掛かっていて入れないようだ。

「よーし」

悟空がドアに向かってパンチ！

強盗の手口ですね。

強引にこじ開けた家に悟空、侵入。

その時だった。

「とーっ！！！」

斧を持った中年男性が飛び出してきた。

悟空の頭目掛けて振り下ろす。

意表を付かれたのか、悟空はまともに食らってしまった。

悟空の石頭に斧も砕けたが、悟空自身もダメージを受けたようだ。

「イデデデッ！」

痛いので済んだだけの悟空に、男性の顔が絶望に染まった。

「やっぱり、だめだったか」

「なにすんだ！このやるうっ！」

悟空は如意棒を出して男に詰め寄った。

「す、すいません！ウーロン様！お金や食い物ならいくらでも差し上げます！ですが！ですが、どうか娘だけは！娘だけは！」

「へ？ウーロン？」

「落ち着け、おじさん。俺らはそのウーロンじゃない。ていうか誰だよ」

「へ？」

そして

「なーんだ、ウーロンじゃないのか」

「来る時間が早いと思ったら」

緊張が解けたのか、各家から村人たちが顔を出した。誤解も解けて、俺達はおじさんの家の中に案内された。

悟空は、娘さんの治療を受けている。

「私だったら、死んでいたところよ」

「いやー、すまん。てっきりウーロンのヤツが化けた姿だと」

悟空が娘さんをじっと見ている。
そして。

「きゃあ!？」

あるうことか悟空は、娘さんの股間をパンパンしたのだ。
そして一声。

「お前、女だろ？」

すかさずブルマのツッコミが入る。

「いてっ！なにすんだよ！」

「パンパンすなっ!!!」

うーむ。

悟空のボケに対するブルマの突っ込みが反射の域になってきたな。
兎に角ボケれば突っ込むな。

「おじさん、ウーロンって何者なんだ？」

悟空とブルマの突っ込みは置いて話を進めよう。

おじさんの話によると、ウーロンはこの辺りに住む妖怪だって。

様々な姿に変化する術を持ち、本当の姿を見たものは誰もいないらしい。そりゃそうだ。

正体が仔豚さんだと知られれば袋叩きだ。必死で隠すだろう。

昨日の事だ。

鬼の姿で現れたウーロンは、おじさんの娘さんを見初め、自分の嫁にすると言っただ。今日の十二時に迎えに来るらしい。「今は十一時五十分か。もうすぐだな。」

「こいつが、かなりのスケベヤロウで既に何人もの娘が攫われているのです」

「そんなやつ、やつつけちゃえばいいのに」

「と、とんでもない！こ、こーんなでつかいヤツですぞ！」

「そうだわ！」

そこでブルマが何かを思いついたように声をあげた。

「ねえ、おじさん。こういう球、見たことない？」

「はて？わしは見たこともないが…」

「はいな！わたしや、それと同じもん持つとるぞい！」

おじさんが首を傾げていた時だった。

家の周りに集まっていた人垣からおばあさんが出てきた。

星が六つ。六星球だ。

「どう？おばあさん。それを私達に頂けるなら、そのウーロンって妖怪、退治してあげてもいいわよ？」

「退治してくれんはありがたいんだけども、女のお前さんにゃ、ちーとムリじゃないかえ？」

「退治するのは私じゃないわ！この」

パンパン！

ブルマが指さした悟空は、おばあさんにパンパンしてました。

「アンタも女だろ？」

「ぼ、ぼうやったら！」

「見境なしにパンパンすなっ！」

おばあさんも頬を染めるなよ。気持ち悪い。

そんな訳で、俺達一行はウーロンを退治することになった。しかし問題があった。

ウーロンを倒しても攫われた娘を取り戻さないと意味が無い住処を突き止める必要があるのだ。

ブルマが悟空を女装させようとしたが、俺が却下した。

「なんでよ…」

「ブルマ、要は殺さずに仕留めればいいんだ」

「いや、だからそう簡単に行く相手じゃ」

「戦ったこともないのにか」

おじいさんの言葉に俺が反論する。

「間違いない。ウーロンは弱い」

「ちよつと、なんでそんなことが分かるのよ」

「あのさ、おじさん。今までウーロンによって、殺されたり怪我を負わされた人っていますか？」

「い、いや、そりゃおらんが…」

「見たところ村も壊されてねーし、化物が暴れた様子もない」

おじさんの言葉にブルマも怪訝な表情になった。

「どうやら疑問を感じたらしい。」

「この村で今まで、一切の血が流れていないのだ。妖怪の賊が？それはないだろう？」

俺の話に、村のみんなが納得したようだ。

「そつえば、今考えれば」

「わしらは、恐ろしい姿に騙されていただけなんじゃろつか？」

「とにかく、正面から迎え撃てばいいんだよ」

「オラもそのほうがいい」

悟空も乗り気だ。決まりだな。

逃がさないようにソッコー捕まえて、ジ・エンドだ！
そこで

「ウーロンだ！ウーロンが来たぞーっ！！」

どうやら現れたみたいだな。

ズシン、ズシンと足音を響かせながら現れたのは、タキシードを来た。ブタ面の鬼だった。手には向日葵の花束を持っている。

俺と悟空は、迎え撃つ様におじさんの家の前で立っていた。

俺達の前まで歩くと、ウーロンは足を止めた。

俺達を睨めつけると、辺りをギョロギョロと見回して口を開いた。

「娘は、俺の花嫁は何処だ？」

「花嫁？ああ、あの娘はお前なんかと結婚なんてしたくないって」

「な、なんだとっ!？」

「まあ、そついう訳だからさ、あの子の事は諦めるんだな」

「ふ、ふざけるなよっ！貴様、俺様が誰か分かるのか？」

「はんっ！カツコだけのウーロン様だろ？」

「な、なにい！？」

「お前って、本当は弱いんだろっ？」

「バカ言え！この俺様の強さときたら、世界一だって評判なんだぞ
っ」

「世界一ねえ」

俺の疑わしげな視線にウーロンは更に冷や汗を流す。

こいつ、往生際が悪いな。

もうバレてんだよ。皆もう、お前なんかにはビビってないからね。

「そ、そそそ、そういうお前はどうかだ！？強いのか？」

「ああ、この世界で一番強いぞ」

「ほ、ほう。大した自信じゃないか」

ウーロンはレンガを取り出し、ソレを積み重ねた。

レンガの数は三つ。大体、悟空の身長の半分ぐらいだ。

こいつ、アホか。まさかここまで阿呆とは…。

「なら、コイツを素手で割れる」

ドロンミッ！

「ひっ！ひいっ！」

いきなりの轟音にウーロンがたじろく。

その轟音は俺が出したものだけどな。

俺はレンガを踏みつぶしていた。

タダ踏みつぶしたわけじゃない。

俺が踏みつぶした時、地面は砕け、亀裂が入り自身の如く大地が揺れる。

かなり手加減はしているが、脅しとしては十分なはずだ。

地面に出来た亀裂はウーロンまで伸び、更に後ろに見える壁まで裂いた。

ウーロンは足を亀裂に落とし、ジタバタともがいている。

「ひええー。す、すげえなあ」

これには流石の悟空も驚いたようだ。

啞然とした表情で俺を見上げていた。

なんか気分いいな。

「へ、変化つ！！！」

じたばたしていたウーロンが声を上げた。

BON!

煙と共に現れたのは一羽のコウモリだった。

どうやら逃げる気のような。バカめ！

「じよ、冗談じゃない！こんな化け物を相手にしてられるか！」

「そついうお前は妖怪だろうが」

「あ、あばよー！」

「まあ、そう慌てるなって」

「ええっ!？」

コウモリに変身して空を飛んでいくウーロン。

ソレを俺は高速移動によって一瞬で回り込むと、取っ捕まえた。ウーロンによつては何もかもが予想外。

まさに悪夢だっただろう。

下の方で悟空も驚いているようだ。

「き、消えた!？」とか言ってるし。

それにどのみちコイツに逃げることはできない。

俺が捕まえるまでもないのだ。捕まえたのはノリだし。つまり。

BON!

「し、しまった!」

時間切れだ。

原作なら一度逃げ出し、一分間のインターバルを挟んで現れる。

だからこそ、それなりに逃げる事が出来たのだ。

だが今回はそうはいかん。

これ以上、ウーロンがメインの話なんて続けたくないからな。

登場して早々に終わらせてもらおう!

元の姿、仔豚に戻ったウーロンは逆さまになって俺に足を掴まれていた。

「ゲームオーバーだな」

ウーロン村の上空でアッサリと捕まってしまったのだ。

「まさか、正体が唯のブタヤロウだったとはな」

「お、お前、何者だ？」

俺はウーロンの問い掛けを無視して村に降りた。

「まさか、ウーロンの正体がこんな子供だったとは」

「怒る気にもなれん」

「わしらは、恐ろしい姿に騙されて抵抗できんかったからのう」

村の皆は、それほどウーロンに怒りの感情は向けていなかった。
呆れるやら情けないやらで、どうしていいか分からないといった感
じだ。

ひとつだけはつきりしている事は。

「おまえ、ちゃんと謝っとけよ」

「はい、申し訳ありませんでした」

しょんぼりした感じでウーロンは謝った。

「おい、さらった娘は無事なのか？」

「はい、凄く」

「とにかく！あなたの住処に案内してもらおうよ！」

こうして俺達はウーロンに隠れ家までの道のりを案内させた。
その道中。

「なあ、マーシユ」

「どうした、悟空」

「おめえ、むちゃくちゃ強いな！。オラ、びっくりしちゃったぞ！」

「まあな」

「そうよ！あなた一体何者よ！」

「ブルマには前に言っただろう？」

「まさか、本当に？」

「さあな」

「なあ、なあ」

悟空が俺の服を引っ張る。

お子様のこつという仕草っていいな。

「今度オラに修行つけてくれるか？」

なんか悟空に懐かれたみたいだ。
参ったなあ。出来ればカメ爺さんに懐いて欲しいんだけど。
こりゃ気功波の類は見せられんな。

「また今度な」

俺は適当に答えると、ブタヤロウへと意識を向けた。
そして小声で一言。

「逃げれば殺す」

まだ他の星へいた頃、敵に対して向けていた殺気を込めて呟いてやる。

「ヒイツ!?!」

ウーロンは完全に怯えてしまったようだ。
少し大人げなかったかな？

「まあ、そんな訳でキリキリ歩け!」

俺は、ウリウリと足をウーロンの背中に擦りつけながら、先を急ぐよう促した。
そして

「あんだ、生意気な家に住んでるわね」

俺もブルマの言葉には同感だ。こんな仔豚さんが住んでイイ家じゃない。

オオカミにでも吹き飛ばされてしまえ！

「ふふん！そこらじゅうから金を巻きあげて建てた家だ」

ウーロンは得意げに言った。

なんかムカつく。

「おい、調子にのるなよ？殺すぞ」

「ひつ、す、すみません！マーシュさん！」

さん？

こいつ、完全に恐怖を刷り込まれた顔してるな。

殺すとか冗談なのに。面白いから訂正しないけど。

村の人は、我先にと家の中へ入っていく。

漸く娘と再会だからな。無理もない。

俺も後を追った。

「ヘッジー！迎えに来たぞ！」

「ホッグちゃん！ママよー！」

「リーーッ！もう安心だぞ！」

おいおい、ソニックかよ。

俺は心の中で突っ込みながら家の中を見渡した。

俺達が見たものは

「いいの。私達のことなら放っておいて」

「畑仕事よりも、こっちのほうがいいもーん」

「あ、ウーロンちゃん、おかえりなさい。おみやげは？」

歳若い娘たちが、おしゃれな格好で寛いでいる姿だった。てつきりひどい目にも合わされている。

そう思っていた彼女たちの親は、啞然としてしまった。

ウーロンは涙を流して言った。

「だから、普通の大人しい娘が欲しかったんだ。こいつら無茶苦茶贅沢するし」

頼むから連れて帰ってくれ。

それがウーロンの切実な願いだった。

流石に哀れに思った俺は、気が付けばその肩に手を置いていた。

「あんだ…」

俺は言った。

「豚の嫁さん探そう。」

「ふ、ふざけるなー！ーっ！！！」

ウーロンの叫びが木霊した。

失礼な！せつかくの俺の妙案なのに！

生きの良いメス豚がお前を待ってるぞ！

そもそも豚のくせに人間の女に興味を持つことが間違いなんだ。

豚は豚同士、交尾でもしてる！

それから次の日。

俺達一行は次のドラゴンボールを求めて旅を再開していた。ボートに乗って河を下っているところだ。

目的地はフライパン山。

あの有名な牛魔王の城だ。

「残りのドラゴンボールは後二つ！思ったよりも早く済みそう！」

ブルマはかなりご機嫌のようだ。

「けどさ。なんでウーロンがいるんだ？」

悟空が隣に座っているウーロンを見て言った。

「あの変身の術はなかなかのものだわ。旅の役に立つわ」

「お、俺はやだぞ！旅なんてメンドクサイ！」

本当に嫌がってるな。

ウーロンは立ち上がって怒鳴った。

「暑いわねー。今夜は下着だけで寝ようかしら？」

「「え？」」

あ、やべ！

遂々、ウーロンと一緒に反応してしまった。

けど、下着だけか。いや、こりゃ唯の罠だ。

ウーロンは騙せても俺は騙されんよ！

「ま、まあ。偶には旅行も悪くないかな」

エロい表情になったウーロンは、再びに腰を下ろした。
パンパン！

いきなり悟空がウーロンの股間を叩く。

「なにすんだ！気持ち悪い！」

「おまえ、男だな！」

「あたりまえだ！見りゃ分かるだろ！」

ウーロンは身を乗り出して怒り狂う。
相当キテルな。ありゃ。

「大体、俺は女は好きだけど！男は大っきらいなんだよ！いいか
！？二度と触るなよ！」

「わっ！」

「く、くくく…、わはははははは！」

悟空とウーロンのやり取り、面白すぎる。
俺は隣で爆笑していた。

続く？

仔猪さん、危機一髪！（後書き）

という訳で、ウーロンは悟空ではなくマーシユが捕まえました。

今回のように、悟空にとって成長するための試練でもなんでもないような事件は、マーシユが介入しても良くね？

そう思ってしまった次第です。

もしよければ意見をお願いします。

悟空にとって必要な試練でなければ、マーシユが暴れても良い。それとも野次馬は野次馬らしくしておけ。

みなさんならどっちでしょうか？

ヤムチャさんがログアウトしました？（前書き）

ああ、書き溜めが無くなってしまいました。
毎日の投稿に支障が出そう…。

ヤムチャさんがロケアウトしました？

マーシユです。

ドラゴンボールも残すところ後二つ。

俺の不老の野望も近い。目指せ！永遠の二十歳！

そう、何を隠そう俺の望みは不老！

勘違いしないで欲しい。不死ではなく不老だ！あくまでも！

一応、この世に用がなくなれば死んでもいいと思っっている俺。

しかし不死では死ねない。

俺のささやかな願いなのだ。

ウーロンにパンティーはやらん！

閑話休題。

俺達は今、ブルマが出したボートで河を下っているところだ。
リーダーによれば南西の方角にあるドラゴンボールが最も近い。

「まだ着かないのか？」

悟空が言った。

確かにさっきから同じ景色ばかり。飽きるな。

それに唯でさえ、俺達は飛べる。それも物凄い速さで。

俺は急いでいるわけではないので、問題ないが悟空は性格的にじっ
として居るのは苦手のようだ。つい文句を言ってしまう。

「おい、ところでお前ら、どこ行こうってんだ？」

「フライパン山」

俺はウーロンの間に簡潔に答えてやった。

「な、何イーっ!? フライパン山っ!!!?」

仰天してる。

ウーロンって結構、色々知ってるよな。

「お前ら知らんのか!? あ、ああ、あそこには、め、めちやくちや恐ろしい牛魔王が居るんだぞっ!」

「平気よ、そんな奴、マーシュと孫くんがやつつけてくれるわ」

俺もか。

不用意に力を見せたのは失敗か?

まあ、どのみち悟空が居るんだ。戦う事にはなるまい。

「お前らは牛魔王の怖さを知らんのだっ!!!」

「おもしろそうじゃないか」

悟空、かなり乗り気だな。

このバトルジャンキーめ。

「俺は絶対に嫌だからな!」

「あっ!?!」

ウーロンはそう言つと、魚に変化した。

逃げるつもりだろうがそうはさせん!

お前みたいなの笑えるやつ、逃がすわけ無いだろう?

「へへーんだっ！あーばよっどー！！」

「残念でした」

「うわわっ！いつの間に!？」

俺は河へ飛び込もうとしたウーロンを隙かさず捕まえた。

「ウーロン、俺の言ったこと、もう忘れたのか？」

「い、言ったこと？」

「逃げれば殺す」

「ひっ！ひいっ!！」

暫く退屈しなくて済みそうだ。

俺の願いが叶うまでの間、せいぜい虐めまくってやるっ。
逃げることは無駄。

そう悟ったウーロンは落ち込んで黙りこんでしまった。

「まあ、まあ。そう落ち込まないの。これあげるから」

おい、ブルマさん！

まさかそれは!？」

あの伝説の嫌がらせお菓子!？」

「な、何だよこれ、キャンディーか？」

こんなモノよりもパンティーが欲しい。
そう愚痴りながらもウーロンは疑いもせずにキャンディーを口に含んだ。

くっ！今すぐあの『キーワード』を言いたいつ！

「なあ、オラにも飴玉くれよ！」

食いしん坊さんだな悟空は。
しょうがない。

「悟空にはこれやるよ」

「サンキュー」

俺は、以前買っておいた惣菜パンを悟空に手渡した。
パンは苦手でも具材のお陰で、悟空は嬉々として受け取った。
そして暫く進んでいると。

「しまった。ガス欠だわ」

ボートがガソリン切れで止まってしまつた。

「ねえ、ガソリンに化けられる？」

「無茶言つなよ」

「じゃあ、岸につけてカプセル出すから、オールに化けて」

「いや、ちょっと待ってくれ」

「何よ、マーシュ」

「俺が飛んでボート押したほうが早くないか？」

「それ採用！冴えてるじゃない!？」

ブルマがウインクしてサムズアップした。

そっだろっ？

流石にオールで漕いで岸まで行くのはイライラする。

ウザイことは禁止だ。

俺はボートの後ろに手を置き、そのまま進んで岸を目指した。

「はは！速いじゃない！」

そして岸に到着。

ボートを木に括りつけて固定して、陸地に降りた。

ブルマは早速、カプセルを取り出そうとポケットに手をつ込んだ。
だが、

「な、ない！カプセルの入ったケースがない！」

ブルマはジャケット、胸、ズボンと全てのポケットに手をつ込んでいく。

そして頭を抱えて髪の毛を掻きむしった。

「きつと河に落としたんだわ！」

「どうしたんだ」

悟空は現状を理解していないのかキョトンとしている。

まあ、俺や悟空には、それほど関係ないからな。別に困らないし。

「カプセルなくしたのよ！こんなんじゃ何処にも行けないわ！」

そう、カプセルはブルマの生命線だ。

俺達に出会う前のブルマが一人で旅をしてこられたのもカプセルが有ればこそだ。家も乗り物も食料も、今のブルマには何も無い。もしもブルマ一人なら、家に帰ることも出来ずに、野垂れ死ぬだろう。

ブルマが騒ぐもの無理ない。

「歩いていけばいいじゃなか」

「あんたは筋斗雲に乗れるから！」

悟空、いいこと言うね。

わめく暇があるなら足を動かせブルマさん。

ん？

そこで俺は、こそこそと逃げようとしているウーロンに気づいた。面白そうなので放っておく。

くくく、どうせ逃げられやしないんだからな。

「だったら、ウーロンにバイクに化けてもらえば？」

「それ採用！あつたまいい！」

悟空の提案をブルマが採用。

さっそくウーロンを呼ぶ。

「ウーロンちゃん」

だが既にウーロンは居なかった。
もう逃げてるよ。

「げっ！いないっ!？」

「逃げたみたいだな」

悟空は筋斗雲で上空から探し回るが、どっちの方角に向かったのかわからない為、見つけ出すことが出来なかった。

ブルマは…、うん。別に困ってないな。

物凄く嫌な笑顔だ。俺も初対面の人間からの贈り物は気を付けないと。

そしてブルマはニヤケながら口を開いた。

「ピー、ピー、ピー」

俺は既にウーロンの場所を抑えている為、ウーロンの様子を見ていた。

ウーロンは、ブルマの声を聞いた瞬間、腹を抑えて苦しみ始めた。

ゴロゴロ、ギョルルウ…。

そんな音が腹から発せられている。

ここからは臭いし、見たくもないからブルマのとこ戻ろう。

「ほら、ウーロンちゃん。下痢になっちゃったでしょう！あんたがさつき舐めた飴玉は私が作ったのよー！」

改めて見ていると、ブルマ、恐ろしい娘っ！

それに無茶苦茶良い笑顔だ。

そして。

「あなた、やりすぎよ」

「いや、面目ない」

腹痛に重なるように脱水症状を起こして倒れているウーロン。どうやらマジでやり過ぎたようだ。ウーロンはピクピクと痙攣していた。

「どうしてくれんのよ！これじゃあバイクに化けさせられないじゃない！」

「でもブルマ、ウーロンの変身の特徴、忘れてないか？」

「何よ」

「こいつは姿は変えられても、体力までは変化しないってことだよ」
「どのみちお前を乗せて走るのは無理だろう。」

それに時間制限もあるようだな。
俺がそのことを話してやると、ブルマも思い出したようにショックを受けた。

そして俺達は結局、歩くことにした。
ウーロンの回復を待った後で。

河を越え、草むらをかき分けて俺達が足を踏み入れたのは荒野だっ

た。

照りつける太陽が恨めしい。

ブルマとウーロンは、拾った木の枝を杖にして、歩を進めていた。しかし二人共体力の限界か、遅々として進んでいなかった。

「おまえたち、だらしないな。オラも付き合っただけ歩いてやっただけなのに」

「そうそう、悟空を見習え」

こんなチミっ子が頑張っただけ歩いてんだ。少しは頑張りなさい。

「わ、私達は、都会育ちですからね！野生児のアンタらと一緒にしないでよね！」

「それにしても、ほとんど砂漠じゃないか」

ウーロンは忌々しそうに、地平線を見て呻いた。

ずっと先の方まで荒野が広がっていて、終りが見えない。

独特の形の岩は、この荒野特有のものだろうか？

だが、ここを通らないとフライパン山に辿り着くことができないのだ。

「も、もうダメ！今日はここまでだわ」

ブルマとウーロンは疲労に耐えかねて腰を下ろした。

「なさないな」

悟空は眉を潜めた。

まだまだ元気で余裕があるためか、ここで立ち止まってしまうのは、もどかしいと感じてしまうのだろう。

暫くしてブルマは岩陰で寝息を立て始めた。

余程疲れていたんだろう。

さてと。

「悟空」

「ん？どうした？」

「俺、ちよっくら辺りの様子を見てくるわ」

「オラも行くのか？」

「いや、お前はブルマの様子を見ててやってくれ」

なんか食いもん取ってくるから。

俺はそう言い残して空を飛んだ。

この後、ヤムチャとプーアルが来るはず。

ここは離れておこう。

高速で飛ぶこと約5分。

荒野を越え山を、海を超えてやってきたのは美しい草原。

俺が自給自足していた場所だ。

食料の生息地は分かっている。

俺は直ぐに狩りを開始した。

5分後

「こんなもんか」

丸々と太ったドードーを三羽。
それが俺の狩りの結果だ。

ちなみにドードーとは鳥山ワールドに登場する独特の鳥だ。
鶏とダチョウが合体したような鳥で、家畜としても良く飼われている。

俺は手に入れた鳥をキュツとシメると、悟空たちの元へ急いだ。

「ん、あれは？」

荒野の上空。

悟空たちのところに向かう途中で、俺はあるものを見つけた。

「ヤムチャプーアル」

俺の下にはエアバイクに乗ったヤムチャとプーアルが、悟空たちの居る方へと走っていた。

どうやら俺は丁度良いところに戻ってきたらしい。

ヤムチャは、悟空たちの前でバイクを止めるとプーアルと共に降りる。

「よう、俺はこの荒野を根城にするハイエナ、ヤムチャってもんだ」

「僕はプーアルだぞ」

「ガキを相手に様にならねえが、生きてこの荒野を出たければ、金かカプセルを渡すんだ」

「ぶ、プーアル？おまえ、泣き虫プーアルか？」

ウーロンが思い出したように声を上げた。
思わぬ場所での再会か。

それにしてもプーアルって凄く可愛いなあ。

モフモフじゃねーか。カリン様みたいなゴワゴワとは違うね。
ていうか抱きたい。枕にしたい。ヤムチャのくせに生意気な！

「知り合いか？プーアル」

「むかし変身幼稚園に通っていた頃、いつも僕をいじめていたウーロンです。女の先生のパンツを盗んで幼稚園を追い出されたエッチなやつです」

プーアル説明乙！

それにしてもウーロンのやつ許せん。

あんなに可愛い子猫をいじめるとはっ！

マジで俺もいじめてやるうか？

「スケベスケベ！おまえなんか嫌いだーっ！」

相当嫌われてるなウーロン。俺も大嫌いだけど。

そりゃイジメを受けた相手だからな。

プーアルの暴露に俺を含めた全員が呆れている。

本当に、しょーもないやつだな…。

「おい！おまえ、ほんとうに強いのか？強いんだな？」

ウーロンは悟空の後ろに隠れて、聞いた。

「え？ああ強いぞ」

悟空の答えにウーロンは満足したように口元を釣り上げた。

「ケツ！ヤムチャだったか？お前らにやるような金もカプセルもねーよ！ケガしねえうちに、とっとと消えるんだな！」

「ほう、なるほど。そんなに天国へ旅行したいか」

ヤムチャは腰の剣を、すっと抜いた。

お、殺気が増した。どうやら殺る気まんまんだな。

「はー！っ！！！」

ヤムチャの袈裟切りを悟空は跳んで躲す。

悟空は空中で如意棒を抜くと、ヤムチャに振り下ろした。

ヤムチャは反射的に剣を盾にして、これを防いだ。

うーむ、一進一退。ワクワクする攻防ですね。

お、悟空が動いた。

「棒よ、伸びろ！」

悟空の声に従って、如意棒は瞬時にヤムチャの腹部まで伸びた。

「ぐふっ！」

流石に棒が伸びるのは想像できなかったのだろう。

意表を付かれたのか、ヤムチャはまともに受けてしまう。

堪らず剣を落としてしまった。

「こ、小僧！その棒、どうやって手に入れた！？」

「死んだオラのじいちゃんに貰ったんだ」

「意のままに伸縮する如意棒を持つものは唯一人！小僧、貴様のじいさんは、何という名だ」

「じいちゃんは孫悟飯だ」

「やはりそうか」

ヤムチャは納得したように頷いた。

何気に情報通ですねヤムチャさん。

一応、この世界じゃ常識なのかも…。

「孫悟飯に孫がいたとは。なるほど、ガキと思って油断できんわけだ」

どうやらヤムチャは本気になったようだ。

いよいよ伝説の技が拝めるぞ！

悟空は…、おい！戦いの最中によそ見るな！

「腹減った〜」

「狼牙風風拳っ！！！」

「へ？」

悟空が視線を戻した時、見たものはヤムチャの靴の裏だった。

ヤムチャの蹴りがまともに悟空の顔に入った。

「はいつ！はいつ！はいつ！」

そこから続く流れるような連続攻撃。

そして最後のオオカミの顎を模したような両手の掌底。悟空は全ての攻撃をまともに受けて吹き飛んでいった。

俺はというと。

「なんだ、本当に狼が出てくるわけじゃないのか」

落胆してた。

だってさ。伝説の技だよ。

ゲームだと自分でも伝説の〜とか言ってたんだよ。

ちよつと期待してしまっじゃん。

なのに…。

もういいや、コイツが悟空の試練になるとも思えんし。

「俺が終わらせてもいいよな」

俺は下の様子を見た。

逃げるのに失敗したウーロンがヤムチャにカプセルを差し出していた。

「頃合いだな」

俺は舞空術を止めて地面に降り立った。

「よう、ウーロン！カプセル持ってんなら初めから言えよな」

「あ！」

ウーロンは直ぐにカプセルをポケットにしまい込んで、ヤムチャから離れる。

行動が早いなコイツ。自衛に掛けてはだけど。

「なんだお前は」

「お前こそなんだ。ウーロン説明」

「こ、こいつ盗賊だ！悟空もやられちゃった！」

「悟空が？」

俺は鳥を地面に置くと、砕け散った岩の山を見た。
下に悟空がいる。気は全く減っていない。

「悟空！」

俺が呼びかけると、ガラガラと岩を押しつけて悟空が立ち上がった。

「殺られてないぞ？」

「腹減った。お、マーシュ！」

「悟空、アイツやつついたら、ご馳走してやるぞ」

俺は仕留めてきたドードーを指さして言った。
途端に悟空の顔が明るくなった。

「め、メシ！そういうことならオラ頑張っちゃうもんね！」

「どうやら更に狼牙風風拳を喰らいたいようだな」

「ご大層な名前だけど、結局は唯の連撃だろ？」

「貴様は…、なるほど。今日は自殺志願者が多いな」

「よし殺そう。悟空、コイツ殺してもいいか？」

「え、でもメシ…」

「やるから。全部食っていいから」

「ほんとかーっ！」

「決まりだな」

俺はヤムチャの前に立った。

「では行くぞ」

「いいから来い」

「狼牙風風拳！」

ヤムチャの蹴りが俺に直撃する。

しかし俺は痛くも痒くもない。悟空のように仰け反ったりもしない。ヤムチャの攻撃は続く。

だが俺は微動だにしない。

ヤムチャは止めとばかりにオオカミの如く両手の掌底を繰り出す。

「はいーっ！ー！！！」

「これだけか？」

「き、効いてない………のか？」

啞然とした様子でヤムチャは後ずさった。

パチン！

俺はおもむろにヤムチャの額にデコピンした。

「うわあああつ！！！！！」

「や。ヤムチャ様~~~~~っ！！！！！」

ヤムチャは吹っ飛んでいき、プーアルはソレを追っていった。
うん、死んでいない。

我ながら絶妙のコントロール。

しかし次から来なくなったら困るな。大丈夫かな？
来るよな？来いよな？絶対に来てくれよな？

「ふわあ、オメエ本当にスゲーなあ！」

「世界一っていうのもウソじゃねーかもな！」

悟空とウーロンが俺の足元にまとわりついて来る。

悟空は構わんがウーロンはヤメる。

「ていうか、ウーロン。おまえ、カプセル有るじゃないか！」

「ギクッ！」

「それにそのサイズ、間違いなく自動車か何か、乗り物だろう？」

「くそーっ、いざという時のために取っとしたのに」

ウーロンは愚痴りながらカプセルをほうり投げた。

BON!

現れたのは見事なハウスワゴンだった。

「悟空、ブルマのやつを起こしてやってくれ」

「おう」

「ウーロンはコイツを調理しろ」

俺はドードーをウーロンに押し付けた。

「何で俺が」

「ああんっ!?!」

トンカツにするぞコラ!

喰わねーけど。

「ひーひーいっ!やります!」

ウーロンは鳥を引きずりながら車の中へ入っていった。

「マジでどうしょ」

俺は自分がしでかしてしまった事を少し後悔しながら、ヤムチャが吹っ飛んだ方をじっと見ていた。

続く？

ヤムチャさんがログアウトしました？（後書き）

ヤムチャって悟空に影響するようなイベント無いですよね。

ログアウトさせていいですか？

いや冗談です。

マジで冗談ですから。

また出てきますから。

荒野のハイエナは死にませんから。

次の話にはケロツとして出てきます。

たぶん…。

おっばい！おっばい！（前書き）

ブルマ、バスト85らしいです。

ウーロンによればパフパフ可能とか…。

それと誤解のないように言っておきます。

これはアンチではありません！

アンチ・ヤムチャでもなければウーロンでもないです。

おっばい！おっばい！

こんばんは。

最強の戦闘民族マーシユツス。下級戦士ツス。

皆さん忘れてないよね？最近の俺は忘れがちだ。

俺達は今、ウーロンの出したワゴンハウスで寛いでいた。

ブルマはワゴンハウスの中を見渡して、文句を言った。

「あんだ、こんなカプセル持ってるのにどうして黙ってたのよ！」

「くそっ！とっておきだったのに…」

俺と悟空はウーロンの出した食事を黙々と食ってる。

ドードードーも調理済みだ。うん、旨そう。

「バスルーム、ある？」

「そこだ」

「ウーロン、覗かないでよ」

ウーロンが指を挿すと、ブルマはバスルームに入っていった。そしてバスルームから顔を出して聞く。

「パジャマか何かある？」

「ああ、俺のを貸してやる」

そして再びバスルームに消えるブルマ。

あ、ウーロンの顔がエロくなった。また何か企んでるな。仕方ない奴…。

「さてと」

俺は立ち上がった。

悟空が食事の手を止めて聞く。

「どっか行くのか？」

「ああ、ちょっと夜風に当たりにな。お前も来るか？」

「オラはもつと食う」

悟空が再び食事を再開すると、俺はワゴンの外に出た。

肌をさす夜風が心地いい。

俺は舞空術で浮かび上がると、夜空に溶けるように気配を消した。待つこと十数分。

「……………来た」

俺は、目当ての人物の姿を確認して安堵した。

時を遡ること十数分前。

ヤムチャのアジトにて。

荒野の独特な岩山を利用して作られた家。

それは周りの岩山に紛れることによって隠れ家として機能してた。マーシユによって返り討ちにされたヤムチャが目覚ました。

「……………はっ！お、俺は？」

「ヤ、ヤムチャ様！気がついてんですね！よかったーっ！」

「プーアル？どうした泣き出して」

「だって、だって！」

「それよりも、プーアル。今度こそカプセルを奪いに行くぞ！」

「ええっ！？」

プーアルは我が耳を疑った。

この人は一体何を言っているのか？

さっきアレほどひどい目にあっただばかりだというのに。

プーアルは昼間のことを思い出していた。

ヤムチャが悟空と戦った後に現れたマーシユという青年。

あれは異常だった。

プーアル自身、ヤムチャが世界一の強さとは思っていなかった。

それでも自分はヤムチャに全幅の信頼を置いているし、その強さも認めている。ヤムチャは素人目で見ても本当に強い。

そこらの有象無象には負けない。だがどうだ。

ヤムチャの必殺技である狼牙風風拳はまるで効果がなくその上、唯一の一撃。

デコピンの一撃でヤムチャは吹き飛び意識を失ってしまったのだ。ヤムチャは怖くないのだろうか？

「あの、ヤムチャ様？」

「どうしたプーアル。早く準備しろ」

「いえ、もう一度カプセルを奪いに行くって事は、あのマーシュってヤツと戦うってことですよね？」

「ん？何を言ってるんだ？当たり前だろう？さっきは失敗して足を滑らせたが、同じ徹は踏まん」

え？

この人は何を言ってるんだ？
足を滑らせた？何時、誰が？

っ！？

「まさか…」

「丁度いい日も暮れたようだ。奴は俺の狼牙風風拳で深手を負っているはず。今度こそ！」

ヤムチャの脳内は自分の都合の良いように改竄されているらしい。
記憶の混乱。

マーシュの一撃によって強く頭を打つたのだろう。
相手がどれほどの脅威かすら思い出せないようだった。
いや思い出したくないのか。

プーアルは、サーッと自分の顔から血の気が引くのを感じた。
本当のことを言って止めるべきか。
それとも主を立てて黙っておくべきか。

「プアール、どうした？行くぞ！」

「は、はい！ヤムチャ様！」

プアールは後者を選択した。

黙っておこう。

それと、ヤムチャ様は僕が守らないと…。

プアールは決意を新たにヤムチャの後を追った。

そして

「ヤムチャのヤツ、結構根性あるな」

アレだけハッキリ実力の差を見せてやったのに諦めずに来るとは…。

俺はヤムチャを賞賛していた。

原作やアニメで見たヤムチャを俺は心の何処かでバカにしていた。

見下してたんだ。
だけど

「ヤムチャ、おまえは漢だったんだな」

俺はヤムチャの表情を見た。

俺に吹っ飛ばされた事などまるで気にしていない、忘れてしまった
という自信に満ちた表情だった。（本当に忘れていたが）

恐れずにやってくるとは勇気のあるやつだ。

俺は自身の中のヤムチャの評価を修正した。勿論上方向に。

様子を伺っていると、ヤムチャとプーアルは、ささっとハウスワゴンに接近した。

どうやら偵察のようだ。

窓から中を覗こうとしている。

ん？あの中は…っ！？

俺の視力は無茶苦茶いい。かなり遠くまで見える。ハッキリと鮮明に。

今俺が見たものをヤムチャも見ようとしている。

っ！？

気がつけば俺は高速で飛んでいた。

「がつ！？」

「え？ふぎゅ！？」

俺はヤムチャを気絶させ、プーアルの口を塞いだ。

「ん？何の音？」

車内からブルマの声。

シャワーの音と共に、声が反射してなんか色っぽい。

俺は二人を抱えて、その場から消えた。

もう少しでヤムチャにブルマの裸を見られるところだった。

俺は何を焦ってたんだ？

プーアルとヤムチャ、二人を離れたところまで連れてきて開放してやる。

「ぶはっ！おまえは！」

「静かにしろ」

プーアルは俺を見て顔を青くしている。
しかし、それでもヤムチャを庇う当たり主思いのようだ。
ヤバイ！可愛い！モフモフしてえー！

「コホン！いきなり悪かったな」

「え？」

謝った俺に目を丸くするプーアル。可愛い。

「いや、ソイツが女の入浴を覗こうとしてたからな」

「女？入浴？」

「知らなかったのか？俺らの仲間だ。そういえばお前らは見てなかったな。実は岩陰に一人、いたんだよ。疲れて寝てたけど」

「そうだったんですか。すいません。でもそれなら……ぶつぶつ」

なにやらプーアルがブツブツ言い始めた。

女の人は苦手とか、ヤムチャ様が会わなかったのは好都合とか。
全部聞こえてるよプーアル。

「まあそういう訳だ。で、今夜はどうする？」

「今夜はもう帰ります」

プーアルはヤムチャを見て言った。

主が気絶した以上、ここにおいても無意味だ。
プーアルはペコリとお辞儀をして変化した。
魔法のじゅうたんだ。

「あの、すみません。ヤムチャ様を僕に乘せてくれませんか？」

「ああ、いいぞ」

俺は快くヤムチャをプーアルに乗せてやった。
二人を見送ると、俺はハウスワゴンに戻った。

「ただいまー。ん、悟空、もう寝たんか？」

悟空は椅子に座ってだらしなくヨダレを垂らして熟睡してた。

あれ？

ウーロンのやつが居ない。

まさか！

俺はハウスワゴンの二階へ登った。

そこには

「うひひ、触ってやる。触ってやるぞ。触りまくってやる！」

そこには眠っているブルマのタオルケットをはがして手をワキワキ
させているブタヤロウがいました。

その前にはおっぱい丸出しのブルマが寝息を立ててる。

ウーロンの手がそのオッパイに触れようとした瞬間。

ガシッ！

俺はウーロンの肩を掴んでいた。

「へ？」

「ずいぶん面白い事をしてんじゃねーか」

「ひっ！ひいっ！マ、ママ、マーシユさんっ！？」

「ウーロン、これはどういう事が説明してもらおうか？」

聞けばウーロンのやつはこのチャンスを待っていたとか…。そしてジューズに睡眠薬を混ぜて悟空とブルマに飲ませた。俺は都合よく出かけて居なかったから無理だったが…。

「それで、これから触りまくってやると…」

「い、いや、こ、これは！……、そうだ！なあマーシユ、黙っててくれないか？あんたもこの女の体、興味あるだろ？」

「一緒に触ろうぜ？」

ウーロンは開き直って俺を肘で押してウリウリしている。こ、こいつ…。

でも、確かに…。

俺はブルマを見てゴクリと唾を飲み込んだ。

いやいやいや！コイツに乗せられるとこだった。

しっかりしろ俺　っ！

「言いたいことはそれだけか？」

「え？」

「ピーピーピーピーピーピーッ……」

「ひっ！ひいひいひいひいっ！！！」

ウーロンは腹を抑えると、下に降りていった。

ざまあみろ！ぶん殴られないだけ有難いと思え！

俺は気を撮り直して、ブルマに向き直った。

タオルを掛けてやろうとして思わず手を止める。

手が！手が！手に乳が触れそうっ！

っ！？

……………。

パンパン！

気がつく俺はブルマのオツパイに手を合わせていた。なむなむ。

勝った！

俺の欲望に理性が勝利した！

頑張ったよね？俺、紳士だったよね？

手を出せない自分がヘタレなのか、それともお子様がいるような場

所で手を出さない自分を褒めるべきなのか。

俺は星空を見て涙を流していた。

続く？

おっばい！おっばい！（後書き）

ヤムチャ、ドラゴンボールの存在を知らぬまま退場。

しかし三度目の正直とばかりにリベンジを開始する予定。

プーアルは主を立てる良い子猫ちゃんです。

結局、ヤムチャとブルマは顔を合わせず。

復讐盗賊リベンジやむぢや、はじまります（前書き）

今回のヤムチャ、後の新展開の伏線です。

色々あってなんやかんやで になる。もしくは になった。

ていう展開に持って行きたい。

そんな訳で始まります。

復讐盗賊リベンジやむちゃ、はじまります

おはようす！

マッシュです。おっぱい星人です。いやベジータ星人です。

実は俺、見るだけなら良いよね、とばかりに朝までおっぱい見てました。

すいません。良いおっぱいでした。

「おはようっす」

お、悟空も起きたか。

ウーロンのバカに睡眠薬を飲まされたのか、まだ眠そうだ。

「おお、おはよう」

「あれ？ウーロンのやつは？」

「ああ、あいつならまだトイレの住人だろ？」

「？」

俺は笑って言った。

悟空は意味が分からず首を傾げていた。

「おはようっす」

ブルマが目を擦りながら起きてきた。

布団を身体に巻きつけている。

「おう、やっと起きたか？ねぼすけさん」

「あれ？ウーロンは？洗濯した服は？」

ウーロンと服、どっちだよ。まあ当然、後者が。

「服なら無いと思うぞ？アイツ、トイレの住人だから？」

「は？それどついつ事よ！……アンタ、まさか！」

「ああ、ピーピー言いまくったからな」

「どつしてくれんのよー！」

「お仕置きだからな」

「お仕置き？どついつ事？」

「あんにやるつ、お前らのジュースに睡眠薬仕込んで夜這いかけよ
つとしてたぞ？」

「な、なんですって！」

「それを止めてやったんだ。感謝しろ」

「う、うん。ありがと。……それにしてもウーロンのやつーっ」

ブルマはウーロンの入っているトイレのドアを睨みつけた。

「もうやめとけ。これ以上やたら死にそうだ」

「…………ふんっ！」

ブルマは面白くなさそうに鼻を鳴らした。

「それから、お前らが寝てる間、またヤムチャって奴が襲ってきた」

「アイツ、また来たんかーっ」

「誰？誰のこと？」

「そっぴやブルマは寝てたな。」

「アイツ、ドラゴンボールの事もブルマの事も知らないままか。」

「ああ、この荒野で旅人を襲っている盗賊だよ。今はウーロンのカプセルを狙ってる」

「なによそれ。聞いてないわよ」

「今言った。それよりまた襲ってくると思うぞ。一応気をつけとけ」

「大丈夫だって！今は腹いっぱいだから負けねー」

ゴロゴロ、

ジャーッ！

ウーロンがトイレから出てきた。

物凄くげっそりした顔だ。喋る気力もないようだ。

「ちょっとーウーロン！昨夜のこと聞いたわよ！覚悟はできてんでしょっねー！」

「……………」

ウーロン、マジで死にそうだな。
まあ自業自得だけど。

「人の服も洗濯しないで！どうやってたらアンタにみたいにエロ中年の小僧が育つのかしら？」

「うう…………、お、前の着れそうな服…………一着だけ…………二階にある…………」

「それ、早く言いなさいよ」

ブルマは二階に走っていった。

ウーロンは…………。

あ、ダウンした。

「オラ、腹減った」

「うーん、ウーロンのやつがこの調子だからな」

俺は倒れているウーロンを見ながら言った。

「冷蔵庫にあるやつ、適当に食っちゃまつか？」

「ああ」

こうして俺達は、常人なら約一ヶ月程は持ちそうな食料を平らげ
てしまった。

ちよっと物足りん…………。

「ウーロン！なによこの服！」

バニーガールが仁王立ちして怒っていた。
いやバニーの格好したブルマだけど。
それにしても似合ってるな。

「ウーロンなら、そこでブツ倒れてるぞ」

「ちっ！使えないやつ！」

「まったくだ。この調子じゃ何の役にも立ちそうにないな。しょうがない。俺が運転するよ」

俺は溜息をつくと、運転席についてハンドルを握った。

「ブルマはどうする？」

「女の朝は忙しいのよ。化粧とかもあるし」

「さいですか。」

「まあいいや。」

「それにしても俺って大人だよ。
ここまでブルマの我俣を流せるんだからな。」

車を走らせること約10分。

悟空は満腹になって横になっている。

ブルマは鼻歌を歌いながら化粧を続けていた。

ウーロンは未だダウン。
運転している俺を覗いて皆結構寛いでいる。
その時だった。

「来た」

俺はバックミラー越しにヤムチャとプールの姿を確認した。
ヤムチャは手にロケットランチャーを持っている。
確かパンツァーファストだっけ？

「どうしたんだ？」

「昨日のやつ、ヤムチャとか言うやつだ」

「また来たんか」

「え、え！？昨日襲って来たっていう盗賊？大丈夫なんでしょ
うね！？」

ブルマは外を確認しようとする。

「ブルマ！敵はロケットランチャーで狙っている。顔を出すな！身
を屈めて頭を低くしてる！」

「ひいっ！」

ブルマは俺に言われたとおりに頭を低くしてその場に伏せた。
万が一にでも当たったらヤバイ。

いっそのこと衝撃波でぶっ飛ばすか？

そう思った時、既に時は遅し。

横に並んだヤムチャはパンツァーファウストを構え、ボタンを押した。

シュルル…。

先端に取り付けられた弾丸が発射され、寸分の狂いもなく、ハウスワゴンのタイヤに命中した。そして爆発。

いい狙いしてるじゃないかヤムチャ。

俺はハンドルを切ってどうにか車体を安定させようとしたが、そんなテクニックは元々持っていなかったので無駄だった。ハウスワゴンは転倒した。

「うわっ!?!」

「きゃあああっ!?!」

「ひひひひっ!?!」

上から悟空、ブルマ、ウーロンの声。

原作通りブルマは頭を打って目を回したようだ。

「ヤムチャ様、女は気絶したみたいですよ!」

「うむ。まさか本当に女がいたとはな」

外から聞こえるヤムチャたちの声。

見ると、既に車から降りたヤムチャは銃口をこちらに向けていた。

「おい!マーシユ、そして小僧!この間の借りを返しに来たぜ!さっさと出てこい!」

「出てこい！」

希望通り出て行ってやるか。

俺は悟空に合図を送って外に出た。

悟空も頷いて俺の後に続いた。

「やいやい！いきなり何すんだ！」

「さあ！今度こそお前らの命をいただくぞ！」

なるほど。

目的が完全に摩り替つとるな。

こいつブルマにも会わず、ドラゴンボールの事も知らんもんだからこんな事になったのか。まあいいや。とりあえず適当に相手してやるか。

いやまてよ。

「おい悟空、お前が相手してやれ」

「オラが？いいのか？」

悟空は戦えることに喜んでるようだ。

あ、プールのやつがホツとしてる。

わかってるって。ヤムチャに非道い事はしないよ。

悟空が勢い良く飛び出した。

「また俺の狼牙風風拳で打ちのめされたいか！」

「昨日は腹が減ってたんだ！今は腹ポンポンだぞーっ！」

「それっ！」

「なんの！」

ヤムチャは悟空を迎え撃つように突きを放つ。

悟空はお返しとばかりに攻撃を繰り返す。

ヤムチャのケリ、悟空のパンチ。お互い避けて防いで攻防。

そしてヤムチャの攻撃を躲し様に放った悟空のケリがヤムチャにクリンヒット。

「ぐわっ！」

「くっ、くそ」

「ヤ、ヤムチャ様！歯が！」

プーアルが手鏡をヤムチャに差し出した。

「あっ！？」

ヤムチャは見事に取れてしまった歯の無くなった空間を見てたじろいた。

そして絶叫した。

「うおおおっ！？俺の凜々しい顔がっ！」

ヤムチャは自分の口元を隠すように手で抑えると、悔しそうな顔を向けて言った。

「ちくしょう！覚えてろよ！」

完全に小悪党の捨て台詞ですね。

「やったな悟空。結構やるじゃん」

「むふふ」

俺の言葉に悟空は得意げなドヤ顔を見せた。それにしてもどうするか。

俺はヤムチャが走り去った方角を見て溜息をつくしかなかった。車、どうしよう。

「歩いていくか。悟空、ウーロンを起こしてくれ。ブルマは俺が運ぶ」

「おう」

こうして俺達は徒歩でフライパン山を目指すことになった。

その頃、ヤムチャ達は…。

「ヤムチャ様、もうやめましょーよ。あいつら荒野から出ちゃいますよ」

「なら追っていけばいい」

「ええ！？荒野から出るんですか？」

「こつなつたらもう意地だ。とことんまで追いかけて復讐してやる」
でなきや気が収まらん。

ヤムチャは忌々しそうに欠けた歯を見て言った。

「それにしてもあのガキ、かなりやりやがる。そのうえマーシユとか言うヤロウもいたんじゃない…」

ヤムチャは手を顎に当てて思索した。
そして

「そつだ！まずは奴らを油断させよう！改心したふりをして近づくんだけだ」

「でもヤムチャ様。アイツらの近くには女もいるんですよ」

「ぐっ！そつだった……いや、まだあの女は気絶しているはず。その間に何か恩を売っておけば…」

ヤムチャは妙案を思いついたようにニヤリと笑うのだった。

その頃、俺達は少しでもフライパン山に近づく為に歩を進めていた。俺は気絶したブルマを背負い、悟空とウーロンはその後をついてくる。

「な、なあ俺にもおんぶさせて」

「 あんっ!?! 」
「 なんでもないです 」

エロい顔のウーロンを一睨みで黙らせると、俺は再び歩き出す。
それにしても…………。

ええ感触や。背中も掌も最高の感触や〜!

背中と掌のぷにぷにとした感触に俺はテンションマックスです。
ごちそうさまですブルマさん!
その時だった。

「 おーいっ! おーいっ! 」

車に乗ったヤムチャとウーロンが現れた。

「 あ、あいつまた来たぞ! 」

「 やあ君たち、さっきはゴメンねー 」

「 は? 」

こいつ、何のつもりだ?

確かコイツはドラゴンボールの事を知らないはずだよな。

ブルマにもフラグ立ててねーし。

ヤムチャは愛想笑いを浮かべながら謝罪の言葉を口にした。

「 よく考えたら、僕達すごく悪いことしてたよねー。本当にゴメン
ねー 」

何が狙いだ?

なんかまだまだ楽しませてくれそうだな。ヤムチャだけに。

ヤムチャはカプセルを取り出すと、俺の背中では眠っているブルマを見た。

あ、後ずさった。やっぱり女が苦手なんだ。

「ヤムチャ様、しつかり！」

「あ、ああ。お詫びにこれを上げるよ」

ヤムチャがカプセルを投げた。

BON!

「あ、車だ」

「じゃあね。気をつけてー、さよならー」

ヤムチャはそう言い残すと去っていった。

「あいつ、根はいいやつなんだ」

悟空は嬉しそうに言った。

いやいや、そりゃ違うよ。悟空さん。

「駄目だよ。人は信じなきゃ」

こりゃ失敗。

こんな子供に説教されるとは。

お兄さんは駄目だな。

「わかったよ悟空。ヤムチャはいいやつだ」

「うん」

「なんか話が旨すぎる」

ウーロンは最後まで疑わしそうにしていた。
俺はブルマを車に乗せるとその横に座った。

「今度はウーロンが運転しろよ」

「ええっ!？」

「なんか文句あるか？」

「……ありません」

ウーロンはフライパン山に向かって車を発信させた。

マーシユ達が乗る車の後方、約数キロ。
ヤムチャとプーアルがいた。

「さあ追跡開始だ。プーアル、手はず通りに行くぞ」

「はい！奴らが困っている時を見計らって手助けするんですね！」

「ああ、なんとかして奴らの懐に入り込む」

「題して！助けられている内に気がつけばオトモダチ！大作戦ですね？」

「そつだ。やつらとなかよしこよしになって油断を誘つ」

我ながら頭いいな。

ヤムチャは車に取り付けたレーダーの反応を追って車を発信させた。マーシュたちに渡した車には発信機が取り付けたのだ。

これで奴らが車を手放さない限り、どこまでも追っていける。

「ヤムチャ様、本当に大丈夫かな？」

プーアルの呟きは誰の耳に入る事もなく荒野の風に溶けていった。

「さあ出発だ」

こうしてヤムチャ達は復讐を胸に住み慣れた荒野を後にした。

続く？

復讐盗賊リベンジやむちゃ、はじまります（後書き）

如何でしたでしょうか。

復讐を誓うヤムチャ。そしてそれを不安に思うプーアル。

でも完全に敵にするわけではないです。

死にしません。

ラムレタスVS牛さん(前書き)

今回は短めです。

かなり原作寄りですまらないかもしれません。

ラムレタスVS牛さん

皆さんこんにちは。

サイヤ人のマーシユです。

長い道のりでした。

ヤムチャ達を退けた俺達は遂にフライパン山へとたどり着いた。

本当は一瞬で辿りつけるんだけど…。

それやると有難味がないからな。

元々は涼景山と呼ばれた美しい山は今では見る影もなく、灼熱の業火によって燃え盛っている。この炎を消すのは亀仙人に譲るか？

「なあ、もう行くのやめようぜ！？牛魔王に殺されちまうよ！」

ウーロンはブレーキを踏んだ。

「その牛魔王ってのは何者よ」

「お前ら本当に知らんのか？学校の教科書にも載ってるぐらいだぞ！とにかく、あの山に近づくものは皆これだ」

ウーロンは自分の首をちよいちよいと着る仕草をした。

「殺されるってこと」

ブルマの間にウーロンは無言で頷いた。

「なるほどな、多分、ドラゴンボールはあの城の中だな」

俺はじつと城を見つめていった。
ブルマもリーダーを確認して納得している。

「ということだからさ！早く引き上げようぜ！」

「バカ言いなさい。ここまで来て」

「お前ら本当に死にたいのか？いくら悟空とマーシユが強かったって、牛魔王は格が違うんだ！」

心外だな。

ウーロンは自分の目より教科書の情報の方を信じるのか。

「俺はぜったいにゴメンだ！」

ウーロンはいきなりクルマを後退させて逃げようとした。
すかさずブルマが口を開く。

「ピーピーピー……！」

ウーロンは腹を下し、クルマから飛び降りた。
観念してついてくるようだ。

その頃、ヤムチャは。

「けっ！おつとろしいガキだ！」

ヤムチャとプーアルの前に、ビキニアーマーの女の子が倒れていた。年の頃は12〜13歳くらい。悟空と同じくらいだ。目を回している。

今から数分前、ティラノサウルスに追われていた彼女は辛くもこれを撃退することが出来た。だが、そこに運悪くヤムチャが通りかかったのだ。

恐竜に追われていてテンパっていた彼女は思わずヤムチャを攻撃。しかし返り討ちにされてしまったのであった。

「さあ！早く奴らを追うぞ。プーアル」

ヤムチャはパンパンと手を叩くと、クルマに乗り込んだ。

「それにしてもヤムチャ様、女の子でも小さな子なら平気なんですね」

「ああ。ロリコンじゃないからな」

「それにしてもヤムチャ様」

「どうしたプーアル」

「僕の勘違いじゃなければ、アイツらの目的地って…」

「ああ、フライパン山だろうな」

ヤムチャは僅か数キロ先に見える炎の山を見ながら汗を流した。

「そんなところに何のようでしょうか？」

「あの悟空というガキと牛魔王。仲良しこよしかも知れん」

「え？」

「武術の達人、孫悟飯と牛魔王は武天老師の弟子だったと聞く。おそらく…」

ヤムチャは悟空が牛魔王に会いに行つたと考えたのだろう。

「じゃあどうしようもないじゃないですか。マーシユと悟空、それに牛魔王もいるんじゃない僕達に勝ち目なんてないですよ！」

「慌てるなプーアル。今、俺達は奴らと敵対していないだろう？」

謝罪の後、クルマをプレゼントしたからな。

ヤムチャは得意げに笑う。

「とにかくまずはガキの方だ！今に見てるよ！」

ヤムチャはクルマを走らせながら手鏡で自分の歯を見た。

忌々しそつに言葉を吐き捨てると、アクセルを踏みスピードを上げた。

牛魔王の城。

俺達はその城下町で足止めを食っていた。

城下町はすっかり廃墟となっており、所々に髑髏が落ちている。武装しているところを見ると、おそらく宝を狙ってきて牛魔王に殺された者たちだろう。ウーロンはビクビクしながら辺りの様子を伺っている。

ブルマはドラゴンレーダーで目標の位置を確認した。

「レーダーを見る限りじゃ、間違いなく城の中ね。つまり飛んでいけば……」

ブルマは俺と悟空の方を見た。

お、出番か？

「孫くん！マーシユ！あそこからドラゴンボール取ってこれる？」

「そうだな。とりあえず行ってみるか？でもどちらか一人は残ったほうがいいな。牛魔王が来たらヤバイし」

「そうね。孫くん。ちょっと行ってきてくれる？」

「わかった。筋斗雲ーっ！！」

「ばか！声がでかい！」

筋斗雲を呼んだ声にウーロンが反応して更に焦った声を出した。そんなに怖いかウーロン。

「ちょっと見てくる」

悟空は筋斗雲に持って城の上空までやってきた。流石の悟空もこの業火に圧倒されたのだろうか。

汗を流して驚いている。
悟空は高度をさせて、城に降りようとした。
しかし

「あちちっ！あちっ！」

炎に行く手を遮られて、堪らず上空まで逃げる。

「んもーっ！根性ないわね！」

ブルマさんよ。そりゃねーぜ！

悟空も頑張ってんじゃん。あれ、マジで熱いって
今の悟空じゃ下手すれば死ぬよ？俺は平気だけど
ん？来たか。

俺は後ろに殺気を感じた。

この気の強さ。間違いなく牛魔王だろう。
空気が流れる。

おそらく武器を投げたのだろう。

この調子なら、俺達に当たらない。間違いなく唯の威嚇だ。

バゴッ！！！

案の定、獲物、斧は俺達に当たること無く、その横の壁に轟音を立
ててめり込んだ。

ブルマとウーロンが身体がビクリと跳ね上がった。

振り返ると、常人の数倍の体格の大男が立っていた。

「ぎええええっ！？」

ブルマとウーロンは同時に悲鳴を上げた。

牛魔王が斧を引きぬいて口を開いた。

「おめえだず。こつたらどごで何しでる？」

「あ、あなたが……、ぎゅ、ギユウちゃんね……」

「あわわわわ……」

ブルマは目がとび出すほど驚き硬直している。

ウーロンはあまりの事に失禁してしまうほどだった。

目の前に殺気をまき散らしている強面の大男が現れたのだから無理もない。

「まさかオラの宝さ、盗みに来たんじゃねえだろな」

「ああ、オレ達はドラゴンボール、こんな球を探しているんだ。ア
ンタの城に一個あるはず。良かったら譲ってくれないか？」

俺はボールを一個取り出して牛魔王に見せた。

「ちょっと！アンタいきなり何を！」

「もうダメだ〜！！」

おいおい、大丈夫だって。

ウーロンもブルマもビビりすぎだったの。

「やっぱり、おめえ達、盗人だな？ぶちころず」

牛魔王は斧を振り上げた。

あーあ。悟空、早く来いよ。
ブルマとウーロンは目をつぶって竦み上がっている。

「ぬんっ！」

「ほいつ！」

俺は振り下ろされた斧を指一般で受け止めた。

「なっ！なああっ！？」

これには牛魔王も仰天した。

武天老師のもとで修行を積んだ自分は超人と言って良いほどの力を持っていた。

本来なら自分の振り下ろした斧は相手をまっぴたつに両断しているはずだ。

これまでもそうだった。

だが目の前の男は自分の斧を受け止めたのだ。小指一本で。

「ぐ、ぐぎぎぎっ！……！」

牛魔王は、歯を食いしばって更に力を込めてきた。

だが俺の指を切り落とすことは出来ない。

当然だ。肉体のスペックは勿論、余りにも戦闘力に差がありすぎるのだ。

力のコントロールによってパワーを下げている、今の俺の戦闘力は約500くらい。100にも満たない戦闘力の牛魔王では俺に傷一つ付けることはできないのだ。

「う、うおおおおっ！……！」

牛魔王が何度も俺の指に向かって斧を打ち付ける。
だが俺の指、身体はピクリとも動かない。
ガンガン！という音だけが辺りに響き渡った。
ブルマとウーロンも啞然としている。

「うそでしょ!?!」

「あわわ、あいつ、やっぱりバケモンだ!」

「ううん。もうこうなったらマーシユ!牛魔王なんてやっつけちゃえーっ!」

なんか自分らが優位になった瞬間、活け高々になったな。
いい性格してら。

「あほか。やっつけてどうすんだ。オレらの目的はドラゴンボール
だけだろ?このオツサンを倒すことじゃねえ」

「アンタなに言ってるのよ!」

「そ、そうだ!やっつけちゃったほうがいいって!」

「いや、確か牛魔王って亀仙人のじいさんの弟子だろ?ちゃんと話
せば分かるんじゃない?なあオツサン」

「お、おめえ...」

牛魔王は手を止めて後ろに下がった。

「確か、悟空のじいちゃん、孫悟飯と兄弟弟子だろ？」

「へ？そうなの？」

「なあオッサン。オレら亀仙人と知り合いなんだ」

「な、なぬっ!？」

「それに孫悟飯の孫も一緒に来てんだ。話だけでも聞いてくれねえか？」

「わ、わかった。そういうことなら……」

「おーいつ、悟空ーっ!」

俺が呼ぶと、悟空はすぐに降りてきてくれた。

「そ、それはっ！筋斗雲でねえがっ!？やっぱりオメエのいっでだごどは本当だったけど」

「ん？おっちゃんが牛魔王か？本当に強そうだな」

悟空が興味深そうに牛魔王を見て言った。

「ごぞう！悟飯さんの孫っで本当だが？」

「じいちゃんのこと知ってんのか？」

「おおっ!?!」

牛魔王はすっかり殺気を消してしまった。
その表情は光明が差したかのように喜びに変わっていく。

「だったらオメエら武天老師様の住んでいるトゴ、知ってるだが！
？」

牛魔王は切羽詰まったように聞いてくる。
さっきまでの様子と比べて、あまりのギャップにブルマ達は啞然とするだけだった。

「いよいよ、かめはめ波か…。
どうしよう。」

俺が亀仙人の出番、奪ってみたいけど…。

かめはめ波、俺も出来るんだよな。

なんせ一番に試した気功波だし…。

それに武道家の中では、かなり有名な奥義だしな…。

「どうしよう」

考えている間に悟空と牛魔王の話は弾み、亀仙人が持つ芭蕉扇を娘のチチと共に借りてくるように頼まれ、悟空は筋斗雲に持って遙か彼方へ飛んで行ってしまった。

あ、しまった！また出遅れた！

まあいいか俺が行っても意味ないしな。

それにしても悟空とチチの出会い見たかったな。

「あいつ、パンパンしてないでしょうね」

俺の横ではブルマがそんな事をつぶやいていた。

続く

ラムレタスVS牛さん（後書き）

ブルマの心配は的中ですね。

悟空のパンパンはチチのフラグを完璧なものにしてしまいます。

かめはめ波は全世界の男の子の浪漫っ！(前書き)

もう少しでヤムチャが咲きそうです。

かめはめ波は全世界の男の子の浪漫っ！

どうも、戦闘民族のマーシユです。

悟空が亀仙人の爺さんに芭蕉扇を借りに行つて十数分。

俺達はくそ暑いこの場所で悟空を待っていた。

「それにしても」

俺は後ろのほうに感じる気配に意識を向けていた。

気配は二つ。ヤムチャとプーアルだろう。

俺自身、ここまでできてヤムチャが改心したとは思っていない。

ドラゴンボールの事も知らない。となると目的は仕返しだろう。

こつちには俺は勿論、悟空と牛魔王までいるというのに、感心な事だ。

いや、マジで凄いや。

あいつ、本当にヤムチャか？へたれで有名なヤムチャか？足元がお留守で有名なヤムチャなのか？

「なに黄昏てんのよ」

「ブルマか。別にそんなんじゃないよ。ただ暇なだけだ」

「そうね。あのじいさんの家の正確な位置まではわからないけど、パツと行って戻つてこれる距離じゃないわね」

「なあ、そういえば俺、お前に聞きたいことがあつたんだ」

「なによ」

「神龍に何を願うんだ？」

「え？」

「そういえば俺って、お前が何を願うのか聞いてなかったからな」

「え、えっと、そりゃ素敵な……」

ブルマは何かを言いかけて止めた。

何やら最後まで言うのを迷っているみたいだ。

原作だと素敵な恋人だったな。

でもヤムチャと出会って、その必要がなくなるんだったな。

やっぱ、この世界のブルマも素敵な恋人が欲しいのか？

「どうした？素敵な、なんだ？」

「い、いや。今のは間違い！そう！私の願いは数え切れないぐらいのイチゴよ！」

「……」

ブルマさんよ。

そりゃないわ。確かに原作でも言ってたけどよ。

ありえねーわ。神龍に願うには下らない願いだよ。

「な、なによ！」

俺が呆れていると、ブルマは照れくさそうに睨んでくる。

「いや、お嬢様なんだから、イチゴくらい買えばいいだろ？それに

数え切れなくらいって、間違いなく腐るぞ？」

「よ、余計なお世話よ！いちいち気分の悪くなる突込みしないでよね！」

本当によく叫ぶ娘だな。沸点低すぎる。

まあ今回は照れ隠しみたいだけど…。

でも、こういうの良いな。

宇宙にいたころは考えられないくらい平和だ。

「すまん、すまん。でもこの旅って結構命がけだろ？そこまでして叶えたい願いつて何か気になってな」

「そ、そうね。実際、孫くんやアンタがいなかったら私、ここまで来れなかったし」

そりゃそうだな。

一人だと間違いなく恐竜に食われるか山賊の餌食だったな。

本当に良く一人で旅する気になれたもんだ。親も放任過ぎるしな。

「まあ何にせよ。ここのドラゴンボールが手に入れば後一個だ。この旅ももう直ぐ終わりかー。なんか寂しい気がするよ」

「え？」

「だってそうだろ？旅が終われば悟空も山に帰るだろうし、ブルマも都に戻るんだろ？」

俺の言葉にブルマの顔が曇った。

ん？どうしたんだ？

「ね、ねえ」

「ん？」

「あ、あんたはどつするのよ？」

「俺？そうだな。もともと俺って旅人だし、ぶらぶらするよ」

「つまりアテとか、ないわけね」

ブルマ？どうしたんだろ？

ブルマは何かを考え込んだ後、頷いてこちらを見た。

「じゃあさ、旅が終わったら家にこない？護衛してくれたお礼とか払ってないし。孫くんはともかく、旅人なら色々、必要でしょ？」

驚いた。

俺はブルマの提案に硬直してしまった。

だってブルマだよ？

原作だと、あれだけ世話になった悟空に対する感謝ゼロよ！？自己中女よ！？今もそうだけど。

「な、なによ？」

おっと、最近自分の世界に入ること多いな。

ブルマの声に現実に戻った俺は返答に困った。

そして、答えを言おうとしたその時。

「おーいー！」

悟空の声が聞こえてきた。

この話の続きはまた今度か。

それにしてもブルマの家か。どうしよう。

とにかく今は悟空だ。よく見るとビキニアーマーの女の子と一緒にだ。原作通りだな。

俺はとりあえず、ブルマの事は置いておくことにした。

「なぬっ！？芭蕉扇はながっただどっ！？」

牛魔王は悟空の話聞いて声を張り上げた。

「でも亀仙人のじいちゃんが来て火を消してくれるってさ！」

「あれがそうか？」

俺は悟空に少し送って飛んできた高速で回転する何かを指差した。あれがコガメラか。ほんとうに小さいガメラだな。欲しいな。アラレちゃんが喜びそう…。

亀仙人が地面に降り立つと牛魔王は嬉しそうに駆け寄った。

「おお！武天老師さまっ！おひさしぶりですだっ！」

「お、おええっ！」

どうやら酔ったようである。

絞まらない爺さんだな。

しばらくして酔いから回復した亀仙人はフライパン山を見上げて言った。

「なるほどのう。これがフライパン山か…。凄いもんじゃ」

「じいちゃん。本当にあんなの消せるのか？」

フライパンの山を改めて見た悟空は亀仙人に聞く。

まあ仕方ないな。普通の感性の人なら、あの炎は人の手でどうこう出来る代物じゃないと思うはずだし。

亀仙人が牛魔王をジロリと睨んだ。

「これ牛魔王よ！」

「は、ははあ！」

「おまえ評判が良くないのう。己の宝を守るためとはいえ幾人も殺生しとるそつではないか？」

「まま、まごとに、おはずかすいかぎりですだっ！つ、つい欲にかられて！でももういいですだ！火さえ消えれば宝など捨てます！」

「まあ、捨てることはないだろう。もったいない」

同感だ。捨てるなら俺にくれ。

「それにしてもあれ」^レときの火が消せんとは情けないのう

お、いよいよかめはめ波か？

俺も実はワクワクしている。

元祖かめはめ波はものすごく有名だ。

それを真近で見ることが出来る。ファンとしては最高の贅沢だろう。うらやましいだろう？

「お、おい。例の条件」

「え？ああそうか」

ん？亀仙人が悟空に何やら話してる。

こそこそして何やってんだ？

確かこの後…、どうなるんだっけ？

ヤバイ。うる覚えでハッキリしない。

細かい事まで覚えてないからな。

えーっと…。

俺が記憶を辿っている間に話は進んでいく。

「あのさあ、じいちゃんがお前に頼みがあるんだってさ」

「え？あたし？」

「ちょ、ちょっとこっちに。ほかの者はそのままでもいいから」

じいさんがブルマを呼び出してる。

あ！思い出した！

確か炎を消す条件にブルマのおっぱいを突付かせてやるんだっけ？

俺もまだ触ったことないのに！

いやいや、何で俺が触るんだよ！

俺は急いで悟空達の後を追いかけた。

そこには。

「パイパイつつかせてくれなきゃ、火は消してやらんもんね」

物凄いエロい表情をした亀仙人がエロい要求をしていた。

「じよ、冗談じゃないわよ！何で私がそこまで大サービスしなきゃいけないのよ！」

「火が消えないと、あの何とかボールが手に入らんのだらろ？このまま帰っちゃおうかな」

「いいじゃないか。胸つつくくらい」

「おのれはだまつとれ！」

悟空の無神経な言葉にブルマは声を張り上げる。

まあお子様だからな。

自分の価値観で言ってるのは仕方ない。

じっさい自分の乳つつくのと変わらんだらうし。

確かウーロンのやつがブルマに化けてパフパフするんだっただっただら別に…。

「いいわ！ただし」

「いやよくねーよ」

「マーシユー！」

いや気に食わん。中身がウーロンでも何か気に食わん。

ウーロンがブルマに化けるのも、変態行動とるのもムカつく。
気が付けば俺は、悟空たちの会話に割り込んでいた。
そっか、俺ってブルマに惚れてたんか…。小学生か。

「げげっ!？」

「げげっ、じゃねーよ!歳を考慮しろよ。じいさん」

「いや、これはその…」

一応、武術の神としての面子もあるのだろう。
自分のしていることがカッコが付かないのは理解しているらしい。
たしかに弟子の手前、これは無様だからな。

「なあブルマ、もし俺が炎を消すことが出来ればどうする?」

「け、消せるの?」

どうして黙ってたのよ!

ブルマは俺に詰め寄ってくる。

だって仕方ないじゃん。

なんだかんだ言っても生のかめはめ波が見たかったし。

「まあ、城ごとフツ飛ばしてもいいなら」

「へ?」

「なんじゃと?」

俺の言葉にブルマ達は、顔を見合わせた。

「なあ、じいさん」

「なんじゃ？」

「俺の感が正しければ、アンタ、かめはめ波で火を消す気だろ？」

「え？かめはめ波？」

「ほう。よくわかったのう」

悟空とブルマは首を傾げ、爺さんは興味深そうに俺を見た。

「武道家の間じゃ有名な奥義だからな。体内の潜在エネルギーを凝縮して放出する技だろ？」

「そうじゃ。わしが五十年の歳月をかけて編み出した亀仙流の奥義、かめはめ波じゃ」

「やっぱりな」

「あんた、よくそんなこと知ってるわね」

「一応、武道家の端くれだからな」

それにヤムチャも知っていた情報だ。

この地球の常識を学ぶ上で、亀仙人の名前は結構見た。

本にも載っていたからな。

俺は以前、購入した本を取り出してブルマに見せてやった。

「これって！」

歴史の人物として載っていた亀仙人の写真を見てブルマが驚く。写真と亀仙人を見比べている。そりゃ驚くよな。

歴史の本に載るような偉人がこんなスケベじゃ…。

「まあそういうわけだ」

「おぬしはどうやって火を消す気じゃ？」

「ん？かめはめ波で消すけど？」

「なんじゃとっ！？」

「教わってないけど、要するに気功波の類だろ？型も大よそ検討つくしな」

間違っていたら指摘よろしく。

実際に間違っていたら恥ずかしいしな。

俺は牛魔王の元に向かって歩き出した。

「ま、待つんじゃ！せっかくのパイパイがっ！」

あ、亀仙人そうとう焦ってるよ。

でも残念でした！おまえだけに良い思いはさせん！

「おまたせ〜、色々あって火は俺が消すことになったぞ〜」

「武天老師さま！こりゃどういことだべがっ！？」

「まあまあ、いいじゃねーか。おっさんは火さえ消えればいいんだろ?」

「やらせてみるが良い。それに、本当にかめはめ波が撃てるのか見てみたいしのう」

亀仙人、切り返し早いな。

急にマジメモードになるのは反則だろ?

まあ、俺も少しはマジメにならないとな。

なるべく、本当になるべく気を抑えて撃たないと城は勿論、山も一緒に消し飛ばしてしまうからな。

まあコントロールは得意だから、万が一にも失敗はないけど…。

「よつと」

俺は原作の亀仙人に習って崩れかけた壁の上に飛び乗った。

中腰になって両掌を合わせて腰に持っていく。

そして亀仙人の方を見て言った。

「ポーズはこれであってる?」

「う、うむ…。おぬし、本当に何者じゃ?」

「まあ、いいじゃん。じゃあ気を取り直して!」

俺はフライパン山へ向き直った。

抑えておいた気を少しだけ高める。

勿論、炎のようなオーラは身体から漏らさない。

あれやると間違いなく視界に移る範囲、全部消し飛ばしてしまうか

らな。

俺は一度、前に向かって両手を突き出した。
そして掌に気を集めていく。

「か〜〜」

ゆっくりと腰に両手を持っていく。

「め〜〜」

目標はフライパン山の炎。

一点に絞って威力を上げずに範囲を上げて威力を下げる感じだ。

「は〜〜」

ちよっと気を上げすぎたな。少し下げないと。

「め〜〜」

俺の掌に集まった気が塊となって体外に出る。
俺の掌から光が漏れ出し身体を覆っていく。

「まさかつ！本当にできるだがっ！？かめはめ波を！？」

「ぬう……、あやつ」

うんうん！周りの反応、気分いい！
ならば見るがいい！俺流のかめはめ波をっ！！
俺は両掌を前に突き出して叫んだ。

「波~~~~~~~~つ!!!」

光の線だった。

俺の両掌から撃ち出された極太の光線は、まっすぐにフライパン山に向かつて伸びていく。辺りを閃光が覆いつくした。

「さあ、消えたぞ」

俺は壁から降りると、皆の顔を見渡した。

あれ？もしかして俺、はずした？

開いた口が塞がらないとはこの事だろう。

皆はあまりの光景に仰天している。

なぜなら俺の予告どおり、フライパン山の炎は消え去っていたからだ。

しかも城は殆ど壊れていない。

我ながらナイスコントロールだ。

「た、たた、たまげた」

やっとの思いで悟空が口を開いた。

マジで気分いいな！これは癖になりそうだ！

……はっ!?

いかんいかん！これからは自重しないとっ！

さてと、気を取り直してドラゴンボールを探さないとな。

いや、城も壊れてないし探す必要は無さそうだな。

俺はドラゴンボールを貰うために、城に向かつて歩き出した。

ヤムチャは愕然とした表情で目の前の出来事を見ていた。

背中に冷や汗が流れる。

「ヤ、ヤムチャさま」

プーアルが心配そうにヤムチャの顔を覗きこんだ。

「ば、バカな…、あ、あいつ……、かめはめ波をつ！？あれが、かめはめ波？」

その時のヤムチャの心を占めていた感情は恐怖だった。

フライパン山の炎は伝説になるほどのものだ。

それをマーシユは事も無げに吹き飛ばした。

圧倒的な暴力。あれは自分の理解の範疇を超えた力だ。

ヤムチャは身体中を震えさせていた。

それはやはり恐怖。

違う。

それだけではない。

「……………は、ははっ！な、なんてやつだ…っ！」

「ヤムチャ様？」

ここまでくると、もはや笑うしかない。

マーシユがヤムチャの心に植えた感情、それは憧憬だった。

ヤムチャの脳裏に先程の圧倒的な光景が蘇ってくる。

「プーアル、俺は決めたぞ」

「え、ヤムチャ様？」

ヤムチャは汗で一杯になった手を、グツと握り締めると物陰から隠していた身を出した。そしてマーシユの方へと歩き出す。もはや隠れる必要も、その気もなくなったのだ。新たな決意を胸にヤムチャはマーシユの下へ走った。

続く

かめはめ波は全世界の男の子の浪漫っ！（後書き）

かめはめ波は全ての男子の憧れ。

撃つてみたいと思うのは仕方が無いかと…。

ヤムチャも憧れます。

少しネタバレ。

ヤムチャ弟子入り。

ヤムチャが仲間に加わった。

ヤムチャ魔改造。（一応、無印の範疇の強さ）

天下一武道会優勝はヤムチャ。

ヤムチャ咲きました。

こんな感じにしようと思っています。

唯一の弟子ヤムチャの死が超サイヤ人覚醒の条件にするとかしないとか…。

次回、『弟子は飲茶』にお楽しみに！

史上最強の弟子ヤムチャ！（前書き）

遂にヤムチャの弟子入りです。

漸くここまで来ました。

長かったような短かったような。

これで暫くの間、劣化原作扱いしなくて済みそうです。

史上最強の弟子ヤムチャ！

どうもです。

フライパン山の火を消したマーシユです。

かめはめ波で消したマーシユです。

亀仙人を差し置いて、でしゃばったマーシユです。

「たまげただ。まさか本当にかめはめ波さ、撃ちまうとは」

「見事じゃ」

「アンタ、本当に何者よ」

皆から賞賛を受けているマーシユです。

気分いいなあ。

あの程度のことまでここまでチャホヤしてくれるとは。

「なあ、マーシユ。すげえ技だな。オラにも教えてくれよ」

おお、悟空が俺に教えを請うとは。

仕方ないな。そこまで言うなら。

「まあいいか。案外、悟空なら簡単に出来ると思うし」

「ほんとか!?!」

俺の褒め言葉に悟空は喜ぶ。

「悟空、さっきの俺を思い出しながら真似してみる」

これだけ言えば十分だろ。

「わかった!」

悟空はかめはめ波のポーズを取ると、勢い良く両掌を突き出した。

「ハッ!」

ババンッ!!!

悟空の掌から細かい気功波が撃ちだされた。

放たれた気功波は、直ぐ目の前のクルマに直撃。破壊してしまった。

「あら」

悟空は不思議そうに自分の手を眺めている。

「でも、マーシユには全然叶わないや」

「まあ、要修行だな。あれは元々、亀仙人のじいさんの技だし、詳しく知りたきゃじいさんに聞くんだな」

「いや、それにしても素晴らしいだ。流石は悟飯さんのお孫さんだ
へ」

「なにっ? 悟飯の孫じゃと?」

「あれ? 老師様知らなかったただか?」

「なるほどのう」

亀仙人は悟空の力に納得したように頷いた。

「これ、小僧。悟飯のじじいは元気か？」

「じいちゃん、とつくに死んじゃったよ」

「なんじゃと？ううむ……、惜しい男を亡くしたのう」

亀仙人は愛弟子の死を悼む様に目を伏せると、思いついたように口を開いた。

「どうじゃ？わしの家に来んか？修行次第でわしを抜けるかも知れんぞ？」

「ほんとか？…でも」

悟空は一瞬喜んだが、迷ったように俺の方を見た。
まさかこの流れは…。

いや、悟空には亀仙流の道着だろ？

この時期からサイヤ人の戦闘服は駄目でしょ？

「弟子入りしたらどうだ？お前のじいちゃんの師匠だったんだろ？絶対に強くなれるって」

「そつか。わかった！じゃあドラゴンボール探しの旅が終わったら行くよ」

やれやれ。これで一安心か。

正直な話し。人に教えた事なんてないからな。

俺の修行方法って、原作知識やネタ知識からの引用だし。

「だったら俺を弟子にしてくれ！」

その時だった。

後ろから男の声が響き渡った。

声の方へ視線を移すと、そこにはヤムチャが立っていた。

普通はカツコイインだろうが、歯が欠けているためひょろきに見える。

「わわっ！ヤムチャだ」

ウーロンは怯えた様子で物陰に身を隠した。

「ふーん。彼が襲ってきた盗賊？せっかくハンサムなのにシマラないわね」

ヤムチャの欠けた歯を見てブルマはプツと吹き出した。

「ウ…ッ」

ヤムチャは一瞬、ブルマにたじろくが俺の前まで歩いてくる。

そして。

バツ！

頭を擦りつける程の勢いで、その場で土下座をした。

「俺を、どうか俺を弟子にしてくださいっ！！！」

驚いた。

まさかこんな展開になるとは。

でも待てよ。この展開は面白いかも知れん。
何せヤムチャだしな。

ヤムチャより弱いZ戦士はチャオズだけだろうし。
何よりも地球人だ。一定以上は強くなれんだろうし。
短時間で劇的に強くなる訳ないしな。

あまり原作に影響ないだろ？俺も結構介入してるし。
よし、決めた。

「うーん。どういう心境に変化だ？」

「俺、さっきの見てました！感動しました！」

うん。ストレートだな。

かめはめ波で懂れる。その気持ちは分かる。
なんだ。ヤムチャと気が合うな。

「実は俺、さっきまで復讐を考えてました！でも！」

ぶっちゃけたな。

そっとう事まで正直に言うのか。感心するけど。

「さっきのを見ると、復讐なんて考えていた事事態が馬鹿らしくな
って」

「つまり、お前は俺の暴力に屈したと？」

「それもあるけど、すこし違う…」

俺の指摘にヤムチャは首を振った。

「うまく言えないけど、アンタは俺の運命を大幅に変えた、変えるような気がするんだ」

おいおい。なんてカンの良さだよヤムチャさん！
エスパー？霊能力者！？

今の俺の背中、冷や汗かきまくりですよ！

ていうかもう運命変えてますよ！

ヤバイ。なんか罪悪感が…。

こうなったのも俺の所為だしな。腹をくくるか。

「わかった。そういう訳でさ」

俺は仲間達の方を見た。

「仕方ないわね。連れてくってんでしょ？暑苦しいけど…」

「オラもいいぞ。やっぱり良い奴だったしな」

「ほんとうに大丈夫だろうな？」

「ヤムチャさま！よかったですね！」

俺は改めてヤムチャに向きなおった。

「じゃあ今日からお前は俺の弟子だ。いいな」

「はい！マーシユさん！」

「俺のことはマーシユ師匠と呼べ」

「はい！マーシユ師匠！」

「……いやあ」

「照れるなら言わせるなよ」

ウーロン五月蠅い。

仕方ないだろう。

ヤムチャとはいえ、Z戦士に師と仰がれる。

実際にそうなって見て気分良かったんだよ！

そんなこんなで、ヤムチャとプーアルを一行に加えた俺達。俺達は牛魔王からドラゴンボールを受け取った。ブルマが次のボールの所在をリーダーで確認する。

「あつた！西だわ」

「じゃあ行くか」

「そうねって！なによこれ！」

クルマに乗ろうとしたブルマが叫んだ。そうか。

クルマは悟空が壊しちまったな。

「…わりい」

「クルマならオラのをやるべ」

「え？ホント？」

牛魔王がカプセルを取り出して放り投げた。
三人乗りのエアカーだ。正面にはマシンガンも付いている。
イカすぜ。

「素敵！どうもありがとう！」

ブルマはクルマに飛び乗った。
ウーロンも続いてクルマに乗り込む。

「オラも乗って行こう」

悟空、筋斗雲があるだろ？
これじゃあ俺が乗れないじゃん。
まあいいけど。

「俺は飛んでいくかな」

「悪いけど、そうしてくれる？」

ブルマが手をあわせてウインクした。
可愛いじゃないか。
これからの予定には丁度いいし。

「だったら俺のクルマに乗りませんか？」

ヤムチャが自分のクルマを指さした。
コイツは何を勘違いしてるんだ？

もしかしてクルマに乗って行く気か？
弟子にそんな事が許されるとでも？

「は？何いってんだヤムチャ」

「え？だから俺の」

「いや、もうこれから直ぐに修行を始める予定だ」

「え？」

「早速始めるぞ。まずはついて来い」

「え？」

だから、次の街まで走るんだよ。
何を頼けてるんだコイツは。

「そつだな。タダ走るだけじゃ面白くない」

俺は気を収束させて作った剣、気光剣を作り出した。

「なんだ、あれ！？」

悟空が身を乗り出して此方を見ている。

俺は構わず既に朽ちた家や壁を切り刻んだ。

「はあっ！」

それはあっという間に立方体となり地面に落ちた。

うん、大体50キロから60キロくらいかな。
今のヤムチャには丁度いいかな。」

「す、すげー！」

「気とは、こんな事も出来るのか!？」

ふふん。驚いたか。

「牛魔王、これを担ぐ為の道具、籠みたいなの無いか？」

「ああ、あるぞ。もってぎてやるだ」

「サンキユ」

「まっけてける」

暫くして牛魔王が籠を持ってきてくれた。

俺は立方体、もとい重りを籠に乗せると、落ちないように固定した。

「ヤムチャ。コイツを背負え」

「いいっ!？」

「これを背負ったまま次の街までひたすら走れ。準備運動だ」

「じゅ、準備運動?じょ、冗談ですよね?」

俺はとてつもなく良い笑顔をして無言で首を振った。

俺の言葉が本気だと分かったのだろう。

ヤムチャは諦めて籠を背負った。

「くっ！重いっ！」

「ヤ、ヤムチャ様、頑張つて下さい」

「そんな訳だ。ブルマ達は先に行つててくれ。なるべく早く追いつく」

「オラもやろうかな」

悟空が興味深そうに此方を見ている。

「悟空はブルマの方に付いててやれ」

暫く別行動だけど気を付けてな！。

俺はブルマ達の乗ったクルマを見送つて手を振った。

「さあ、行くぞ。あまりブルマ達を待たせる訳にはイカンし」

「わしも、そろそろ帰るとするかな」

「武天老師さま！お元気で！」

そういう訳で解散となった。

そして道中、早速ヤムチャの修行が始まった。

「オラオラ！遅い！もっと早く！」

ちゅどーん！

「ひえええっ！」

「カタツムリに追い抜かれるぞ！もっと早く！」

ちゅどーん！ちゅどーん！

「殺されるっっ！」

「こりゃオモシレーな！癖になりそう！」

道中、気弾の乱射を背後数センチの距離に受けながら、必死で走るヤムチャの姿があった。

背中を焦がしながら涙を流して走るヤムチャ。

さあ俺に見せてくれ！唯のヤムチャじゃ無いところを！

俺は梁山 式の修行を意識しながら、ひたすらヤムチャの背中に向かって気弾を撃ちまくった。この調子だと結構早く付きそうだな。仙豆、自分よりも先にヤムチャに使う事になりそうだ。

第一目標は天下一武道会優勝！打倒ジャッキー・チュン！

俺は自分の中で目標を定めると、再びヤムチャにゲキを飛ばした。

「オラ！もっとスピード上げろヤムチャ！」

この時、俺は忘れていた。

街には恐ろしい兎団（笑）が待ち構えていた事を。

続く？

史上最強の弟子ヤマチャ！（後書き）

盲腸です。

入院＆手術で暫く更新できません。

本当に申し訳ないです。

つと耳、それは男の付けていいもんじゃない（前書き）

どうも、2日前に治っていたんですがちょっと忙しくて遅れました。
とりあえず兎団登場です。

うさ耳、それは男の付けていいもんじゃない

どうも、最強の師匠マーシユです。

ヤムチャを走らせ始めて約五時間が経過。

フル馬拉ソンの時間と距離を悠に突破し、ヤムチャは走り続けた。

既に上半身、裸になっていて全身から汗が噴き出している。最早喋る気力もないようだ。

ヒィヒィと息を吐きながら虚ろな目で走り続けている。

「オラ、ボサツとすんな！」

ドン！

俺の気弾がヤムチャの背中を押した。

まともに受けたヤムチャは地面に突っ伏してしまふ。ふむ、そろそろ限界か。

「おいヤムチャ！」

俺は地面に降りてヤムチャお顔を覗き込んだ。

「ヤバツ！コイツ、死ぬ寸前だ」

俺は急いで仙豆を取り出すと、ヤムチャの口に押しこむ。

「聞こえるかヤムチャ。死にたくなければ気合でソイツを飲み込め」
ヤムチャの指先がピクリと動いた。

俺の声に僅かに反応すると、モゴモゴと口を動かして仙豆を飲み込

む。

そして虚ろな目を見開いた。

「か、身体が…」

ヤムチャは驚いたように立ち上がった。

そりゃ驚くだろう。なんせ先刻まで死にかけてたんだ。

殆どの水分を出し尽くし、精も根も尽き果てかけていたんだ。それが小さな豆粒ひとつで全快した。

うん。やっぱり仙豆はチートだな。

ヤムチャに使うには少し勿体無いが、一応弟子だし仕方ない。

「師匠、先刻の豆は一体？」

「おら、回復したんな行くぞ！」

俺はヤムチャの質問を無視、再び気弾をヤムチャの足元に撃ち込んだ。

「うわっ！」

「そんなもん気にしてる暇があるのか？休憩は終わりだ！さっさと走れ！」

再び泣きながら走り始めるヤムチャ。

元気が戻ったようで何よりだ。

ヤムチャが復活して約一時間、あたりの様子は荒野の景色から巨大なキノコが立ち並ぶ街道に変わっていた。街道ゆえ走りやすくなった事が原因だろう。ヤムチャの足取りも軽いものになっていた。向こうに小さな街が見える。目的地に到着したようだ。

「着いたぞ ヤムチャ。休憩にしよう」

「はあ、はあ………や、やった…、やったぞ」

ヤムチャは足を止めると、その場にへたり込んだ。随分堪えたようだな。

「さてと、悟空たちを探すかな」

ヤムチャのやつは暫くの間そっとしておいてやろう。

俺は仲間を探しながら、弟子の次の修行を考えないとな。

取り敢えず暫くは徹底的な体力と身体造りだな。柔軟さも欲しい。でないと本格的な修行にはとてもじゃないが耐えられないだろうし。

「お、いた」

俺は視線の先にブルマを見つけた。

あのバニーガールは間違いなくブルマだ。

「よう、ブルマ」

「マーシュ、結構速かったのね」

「まあな。それより買い物か？」

「ええ、何でかしらないけどタダで貰っちゃった。美人だと得よね」

無料？

マジでか？

いや待てよ？ああ、兎団か。

あまりにも小物過ぎて忘れていたわ。

俺はブルマのうさ耳を見て思い出した。

兎団の親分。兎人参化。

実力は大した事ないが、その能力は反則的だ。

「なあブルマ」

「何よ」

「食料とかカプセルとかも良いけどさ、まずはその服から何とかしたらどうだ？」

「そんな事わかってるわよ。たまたま洋服店よりもカプセルの店を先に見つけたのよ。私だってこんな格好、早くどうにかしたいわよ」

「そつだよな。あ！あれ、服屋じゃね？」

「え？どこ？」

俺は先にある服屋を指すと、ブルマは急ぎ足で店内に入っていた。

「こんなもんね。バニーガールよりはマシか」

ブルマは手早く着替えを済ませると、鏡で自分の姿を見て納得したように頷いた。

アラ ンに出てくる様な衣服だ。髪は後ろに束ねてポニーテールにしている。

「あの、おたく兎団のかたじゃ?」

店員は目を丸くして聞いた。

「兎団?」

「なによそれ?」

「紛らわしい頭飾りを付けてこないでくれ!」

結果、店員さんに追い出されました。勿論服の代金はきっちり支払わされて。

「私を見ても誰も気にしなくなったわ。うさ耳が何だったのよ」

「少なくとも只事じゃないな。この町で何か起きてるのは確かだ」

「そっね」

「ところで悟空は?」

「孫くんならウーロンとガソリンスタンドにいるわよ。そっちこそあのヤムチャとかいう熱血はどうしたの？まさか置いてきたんじゃないでしょうね」

「そんな事するか。町についてへばっちまったから休ませてるよ」

「全く、最後まで責任取りなさいよね」

「わかってるよっと。どうやら着いたみたいだ」

俺はガソリンスタンドに止まっているクルマを見ていった。ウーロンと悟空がいる。

「おまたせー、色々買ってきたわよ」

「ほんとか？オラハラ減ったぞ」

「よう、二人共、待たせたな」

「マーシュもついたんか？ヤムチャは？」

「向こうで休んでるよ」

悟空はブルマから食べ物を受け取ると、それにかぶり付いた。

「師匠…」

「マーシュさん、ヤムチャ様を置いてくなんて酷いです」

そこにヤムチャとプーアルが合流する。

いや町の外に置き去りにするより遙かにマシだろう？

しかしこれで全員揃ったな。

これで次の目的地に移動できる。

「さあ、ガソリンも満タンになったし、そろそろ行くわよ」

ブルマがクルマに乗り込んだ。

その矢先だった。

「なんだデメエ、文句でもあるのか？ああん!？」

「ひっ！い、いえ、そんな…」

「けっ！相変わらずシケたトコだな」

そこには如何にもという怪しい軍人の風貌の二人組がいた。

二人共柄が悪く、周りに当たり散らしている。頭にはつさを耳をつけている。

なるほど奴らが兎団か。

折角の機会だし、ボスはヤムチャに殺らせてみるか？

俺は弟子のほうをチラ見してほくそ笑んだ。

「おい見ろよ」

「おお、この辺じゃ見ない女だな」

兎団がコチラに向かってくる。

「おい その女 ちょっと俺達につきあってもらおうか」

「なによアンタ達」

「こりゃ珍しい！泣く子も黙る俺達 兎団を知らないとは」

「おまえ、よそ者だな」

ブルマは兎団の頭飾りを見て鼻を鳴らして言った。

「なんで皆が私を見て怯えてたのか、やっと分かったわ」

ブルマは不機嫌そうに背を向けて言い放った。

「アンタたちに付き合ってるほどヒマじゃないのよ」

「ほう、えらく威勢がいいな？長生きしなくねーのか？」

チャキ

兎団の男がブルマに銃を突きつけた。

ブルマは怯える様子もなく、すぐ隣でメシを食べてる悟空に言った。

「孫くん、この人達 悪者だからやつつけちゃっていいわよ」

「そうだな」

もぐもぐと口を動かしながら悟空は兎団を見上げて言った。

口の中のものをゴクリと飲み込む。

「なんだと」

「俺達をやつつけるって？」

ニタリ。

悟空は笑った。

そして

ドゴツ！

悟空の突きが兎団の一人の腹に突き刺さった。
意表を突かれて悶絶した所に更に蹴りが入る。

「いつちよ上がり！」

「コイツっ！」

もうひとりが我に返ったように銃を悟空に向ける。

だが悟空は既に銃口の先にはいなかった。

高く跳躍した悟空は如意棒を抜きつつ男の背後に降り立った。

「ほい！」

如意棒が深々と男の肛門に突き刺さった。

痛そう、というか汚い。悟空、後で洗っとけよな

瞬く間に兎団を倒した悟空は嬉しそうに言った。

「久しぶりに戦ったから気持ちいいな」

「ご苦労様」

「ふふん、バカなやつらだ。悟空じゃ相手が悪いぜ」

俺の隣でヤムチャが楽しそうに言う。

そういえばこの後、兎団のボスが現れるんだったな。いい機会だし…。

「ヤムチャ」

「何ですか？師匠」

「アレで終わりじゃない」

「え？」

「あんな程度の雑魚がたったの二人、街の連中が怯えると思うか？」

「…そういえば」

俺の言葉にヤムチャは納得したように兎団達に目を向けた。

「間違いなくボスがいる筈だ。ヤムチャ」

「なんででしょう」

「ソイツが出てくれば、お前が戦え」

「俺が…」

「もう十分 休んだろ？これも修行だ」

「はい」

「うつく…、よくも兎団に恥を…っ」

話している間に兎団が回復したようだ。

無線機を取り出して、何者かに連絡を取り始めた。

「す、すみませんオヤブン、町に来て下さい。ムチャクチャ強い奴がいるんです」

「ふふん、あいつ何をブツブツ言っただか」

ブルマが余裕の表情で言う。

その時だった。

「きゃああああ！…！」

周りから悲鳴が上がり、町の住人達が慌てて逃げ出し始めたのだ。

「あ、あんたたち！とんでもないことしてくれたな！」

ガソリンスタンドのオジサンもコチラを攻めるように言葉を吐いて逃げ出していく。

そして各々の家に逃げ込み扉や窓を閉めきってしまった。

「来るぞ ヤムチャ。覚悟はいいか？」

「はい」

俺の言葉にヤムチャは気合を入れて兎団のボスの到着を待った。

続く？

うさ耳、それは男の付けていいもんじゃない（後書き）

ヤムチャ

レベル 2

戦闘力 7 9

体力、持久力、脚力が少し上がりました。

必殺技

狼牙風風拳

ところでこのSSのヤムチャ、兎団のボスに勝てると思いますか？
勿論素手で。

服の上から攻撃してもアウトなんですか？
セーフでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7642w/>

ドラゴンボール練習作品

2011年10月5日21時30分発行